

下里見宮谷戸遺跡4

—幼稚園の新園舎建築に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2019

高崎市教育委員会
学校法人里東学園
有限会社毛野考古学研究所

下里見宮谷戸遺跡4

—幼稚園の新園舎建築に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2019

高崎市教育委員会
学校法人里東学園
有限会社毛野考古学研究所

例 言

1. 本書は、幼稚園の新園舎建築に伴う下里見宮谷戸遺跡4の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県高崎市下里見町字宮谷戸 451、452-1、453、454、455、457番に所在している。
3. 発掘調査および整理作業は、学校法人里東学園・高崎市教育委員会・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
4. 発掘調査から整理作業を経て本書作成・刊行に至る経費は、開発原因者である学校法人里東学園に負担して頂いた。
5. 発掘調査は、有山径世（有限会社毛野考古学研究所）が担当し、遺構測量・空撮は小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）が行った。整理作業は、有山が行った。
6. 発掘調査・整理作業は平成31年1月7日～令和元年9月30日の期間で実施した。
7. 本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で「754」である。
8. 本書の執筆についてはIを高崎市教育委員会、それ以外を有山が担当し、編集は有山が行った。
9. 本書に関する資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査・整理作業に携わった方々は以下の通りである。

【発掘調査】 安積智之 五十嵐光子 萩野俊 鬼形敦子 岸ふじ江 新間昌代 鈴木武 関通世
山口友子 山田久志

【整理作業】 石原理久子 磯洋子 鬼形敦子 合田幸子 小谷貴世美 関小百里 竹中美保子
蘿戸玲子 深谷道子 幸田光代 真下弘美

11. 発掘調査から報告書の刊行に至る過程で、下記の機関・諸氏のご教示・ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。（順不同、敬称略）
下里見公民館 伊藤明宏 早田勉 外山政子 三浦京子 吉田秋廣

凡 例

1. 掘図中の北方位は座標北を、断面図の水準線数値は海拔標高を示す。座標は世界測地系を使用している。
2. 遺構の略号は以下のとおりである。
竪穴建物跡：S I、溝跡：S D、配石遺構：S T、井戸跡：S E、土坑：S K、ピット：S P
3. 遺構図および遺物実測図の縮尺については、各掘図中にスケールを付して表示した。
4. 本文中および表中等で記す火山降下物の名称は、以下の略号を用いている。
浅間A軽石：As-A (1783年)、浅間B軽石：As-B (1108年)、浅間C軽石：As-C (3世紀末)、
浅間一板鼻黄色軽石：As-YP (13.000-14.000y.B.P)
5. 遺構土層および遺物の色調観察は『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修 2006) に拠った。
6. 本書掲載の第1図は高崎市発行1/2,500「高崎市都市計画基本図」、第2図は国土地理院発行
1/200,000地形図「長野」「宇都宮」、第3・4図は国土地理院発行1/25,000地形図「下室田」を引用し、
一部改変している。

目 次

| | | | |
|--------------------|---|-----------|----|
| 例言・凡例 | | 7 | |
| 目次・図版目次・表目次・写真図版目次 | | | |
| I 調査に至る経緯 | 1 | 1 竪穴建物跡 | 10 |
| II 地理的・歴史的環境 | 2 | 2 溝跡 | 22 |
| 1 地理的環境 | 2 | 3 配石遺構 | 27 |
| 2 歴史的環境 | 3 | 4 井戸跡 | 28 |
| III 調査の方法と経過 | 6 | 5 土坑 | 28 |
| 1 調査の方法 | 6 | 6 ピット | 35 |
| 2 調査の経過 | 6 | 7 遺構外出土遺物 | 37 |
| IV 基本層序 | 7 | VI まとめ | 39 |
| | | 写真図版 | |
| | | 報告書抄録・奥付 | |

図版目次

| | | | |
|-----------------------|----|---------------------|----|
| 第 1 図 調査区位置図 | 1 | 第 20 図 6号竪穴建物跡 | 20 |
| 第 2 図 遺跡の位置 | 2 | 第 21 図 6号竪穴建物跡出土遺物 | 21 |
| 第 3 図 周辺の遺跡 | 3 | 第 22 図 1～6号溝跡 | 23 |
| 第 4 図 周辺の古墳群 | 4 | 第 23 図 7号溝跡 | 24 |
| 第 5 図 基本層序 | 7 | 第 24 図 7号溝跡出土遺物 | 25 |
| 第 6 図 第1面全体図 | 8 | 第 25 図 8号溝跡 | 26 |
| 第 7 図 第2面全体図 | 9 | 第 26 図 8号溝跡出土遺物 | 27 |
| 第 8 図 1号竪穴建物跡出土遺物 | 10 | 第 27 図 1号配石遺構 | 27 |
| 第 9 図 1号竪穴建物跡 | 10 | 第 28 図 1号井戸跡および出土遺物 | 28 |
| 第 10 図 2号竪穴建物跡出土遺物 | 11 | 第 29 図 1～6号土坑 | 29 |
| 第 11 図 2号竪穴建物跡 | 11 | 第 30 図 5号土坑出土遺物 | 30 |
| 第 12 図 3号竪穴建物跡出土遺物 | 12 | 第 31 図 7号土坑 | 31 |
| 第 13 図 3号竪穴建物跡 | 13 | 第 32 図 7号土坑出土遺物 | 32 |
| 第 14 国 4号竪穴建物跡 | 14 | 第 33 図 9号土坑出土遺物 | 32 |
| 第 15 国 4号竪穴建物跡出土遺物 | 15 | 第 34 国 8～17号土坑 | 33 |
| 第 16 国 5号竪穴建物跡（1） | 17 | 第 35 国 12号土坑出土遺物 | 34 |
| 第 17 国 5号竪穴建物跡（2） | 18 | 第 36 国 1～20号ピット | 36 |
| 第 18 国 5号竪穴建物跡出土遺物（1） | 18 | 第 37 国 遺構外出土遺物 | 37 |
| 第 19 国 5号竪穴建物跡出土遺物（2） | 19 | 第 38 国 周辺の弥生時代の遺跡 | 39 |

表目次

| | | | |
|-------------------------|----|---------------------|----|
| 第 1 表 1号竪穴建物跡出土遺物観察表 | 11 | 第 10 表 8号溝跡出土遺物観察表 | 27 |
| 第 2 表 2号竪穴建物跡出土遺物観察表 | 12 | 第 11 表 1号井戸跡出土遺物観察表 | 28 |
| 第 3 表 3号竪穴建物跡出土遺物観察表 | 13 | 第 12 表 5号土坑出土遺物観察表 | 30 |
| 第 4 表 4号竪穴建物跡出土遺物観察表（1） | 15 | 第 13 表 7号土坑出土遺物観察表 | 32 |
| 第 5 表 4号竪穴建物跡出土遺物観察表（2） | 16 | 第 14 表 9号土坑出土遺物観察表 | 32 |
| 第 6 表 5号竪穴建物跡出土遺物観察表 | 19 | 第 15 表 12号土坑出土遺物観察表 | 34 |
| 第 7 表 6号竪穴建物跡出土遺物観察表（1） | 21 | 第 16 表 ピット一覧表 | 35 |
| 第 8 表 6号竪穴建物跡出土遺物観察表（2） | 22 | 第 17 表 遺構外出土遺物観察表 | 38 |
| 第 9 表 7号溝跡出土遺物観察表 | 26 | | |

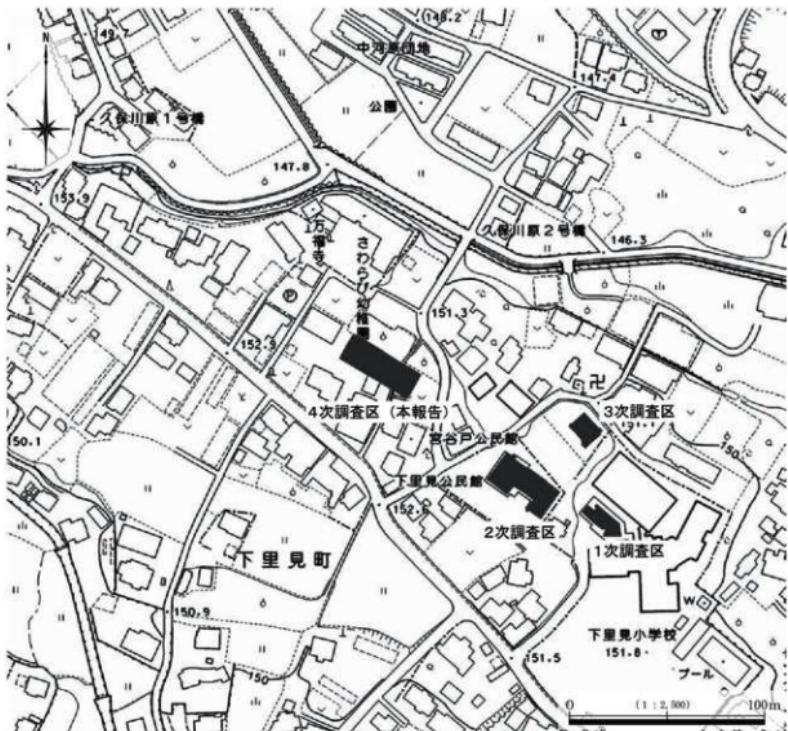
写真図版目次

| | |
|--|--|
| P.L. 1 調査区遠景、調査区全貌 第1面 | P.L. 7 1号配石遺構上面全貌、1号井戸跡全貌、1号井戸跡出土状態、1号土坑全貌、2号土坑全貌、3号土坑全貌、4号土坑全貌 |
| P.L. 2 調査区全貌 第2面、1号竪穴建物跡全貌、1号竪穴建物跡マド全貌、2号竪穴建物跡全貌、2号竪穴建物跡跡化材出土状態 | P.L. 8 5号土坑全貌、6号土坑全貌、7号土坑上面石出土状態、7号土坑最下面石出土状態、8号土坑全貌、10号土坑全貌 |
| P.L. 3 3号竪穴建物跡全貌、4号竪穴建物跡全貌、4号竪穴建物跡 P 2 遺物近景、4号竪穴建物跡 P 2 石出土状態、4号竪穴建物跡 P 2 石近景、5号竪穴建物跡全貌、5号竪穴建物跡跡 | P.L. 9 9号土坑全貌、9号土坑遺物近景、11号土坑全貌、12号土坑全貌、13号土坑全貌、14号土坑全貌、15号土坑全貌、16号土坑全貌 |
| P.L. 4 5号竪穴建物跡跡 P 2 近景、5号竪穴建物跡跡藏穴全貌、5号竪穴建物跡跡藏穴近景、5号竪穴建物跡跡藏穴全貌、6号竪穴建物跡跡藏穴全貌、6号竪穴建物跡跡藏穴近景 | P.L. 10 17号土坑全貌、基本層序A北西壁、基本層序A南西壁、出土遺物（1） |
| P.L. 5 2号溝跡全貌、3号溝跡全貌、4号溝跡全貌、5号溝跡全貌、6号溝跡全貌、7号溝跡上断面 | P.L. 11 出土遺物（2） |
| P.L. 6 7号溝跡全貌、7号溝跡遺物出土状態、8号溝跡全貌、7～8号溝跡全貌 | P.L. 12 出土遺物（3） |

I 調査に至る経緯

平成 28 年 12 月、事業者および施工責任者である学校法人里東学園から、高崎市下里見町において計画しているさわらび幼稚園新園舎建設に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である下里見宮谷戸遺跡内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年 12 月 20 日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書が提出され、翌年 2 月 6 日と 7 日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、古墳時代の土坑とピット群を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「下里見宮谷戸遺跡 4」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成 30 年 12 月 3 日に学校法人里東学園と民間調査機関有限会社毛野考古学研究所との間で契約を締結、また同日に学校法人里東学園・有限会社毛野考古学研究所・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督することとなった。



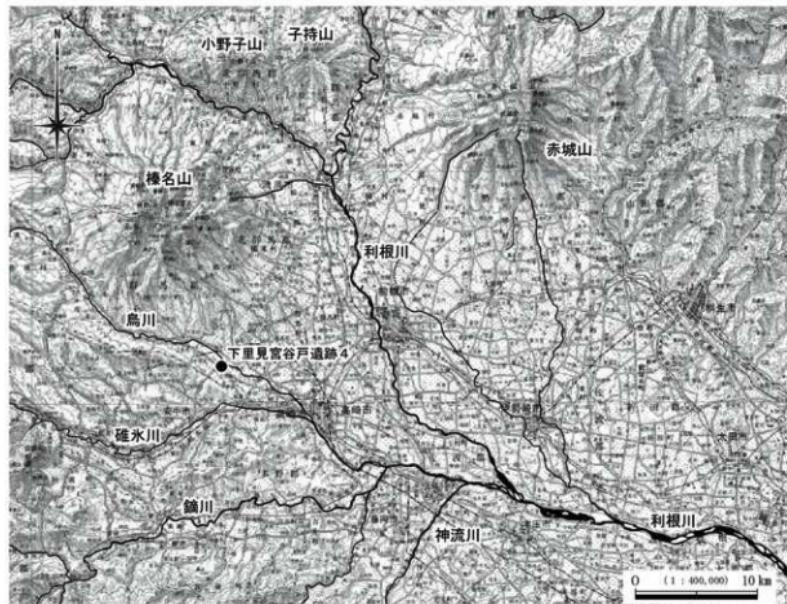
第 1 図 調査区位置図

II 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

下里見宮戸遺跡は、高崎市西部榛名地域（旧群馬郡榛名町）の下里見町に位置する（第2図）。榛名地域は榛名山の山頂部から南半域を占め、烏川を挟んだ南側の里見丘陵（秋間丘陵）尾根筋までを範囲としている。当該地域は南東流する烏川によって南北に分断されており、地形は烏川の浸食によって形成された河岸段丘、約5万年前に榛名山の火山活動で発生した室田火砕流によって形成された台地（里見台地・室田台地・十文字台地・本郷台地）と、これらを侵食する小河川、そして烏川沿いの谷底平野からなる。

遺跡地は烏川南岸の里見地区に所在する（第3図）。里見地区は烏川を北の境とし、南は安中市に接する里見丘陵の稜線によって区切られた、北西から南東にのびる範囲である。地形は南から里見丘陵の稜線、丘陵北斜面、烏川による上位河岸段丘、室田火砕流台地の南端である里見台地、これを浸食して形成された下位河岸段丘、低地となる。また、里見丘陵東北側の山腹から流出する小流が、各所で上位河岸段丘を分断流下して集まって里見川となり、里見台地との間に小規模の谷地形を形成している。里見川は台地を分断して下位河岸段丘面に流出し、向井川と合流し蛇行しながら南東流する。これらは下位河岸段丘を貫流して開析し、複雑な低地を形成している。本遺跡は下位河岸段丘面の周縁に立地し、遺跡の北東側は低地へと急傾斜している。標高は現地表面で約153mである。



第2図 遺跡の位置

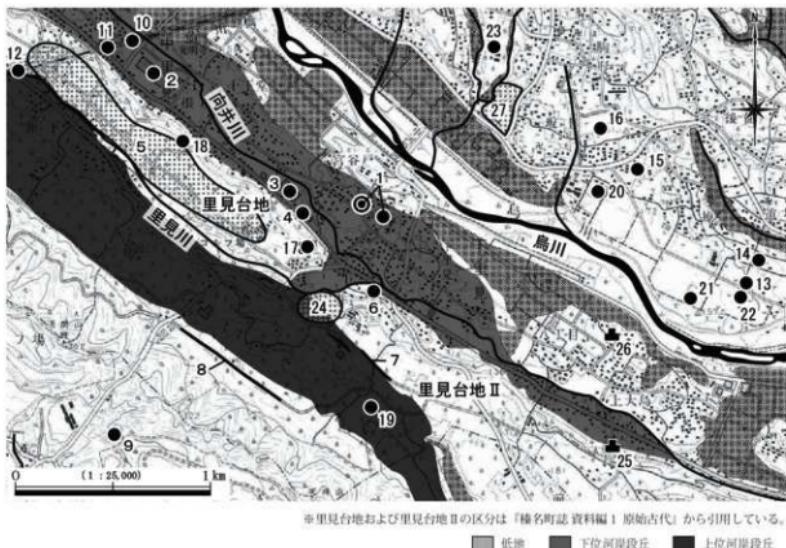
2 歴史的環境

ここでは本遺跡が立地する鳥川右岸に主眼をおいて、周辺遺跡の概略を記載する（第3・4図）。

旧石器時代 本遺跡周辺で当該期の遺跡は発見されていない。榛名地域全域に目を向けても、鳥川左岸の十文字台地上にある三ツ子沢中遺跡と白岩民部遺跡の2遺跡が知られるのみである。ともに後期旧石器時代のナイフ型石器を主体とする遺跡である。

縄文時代 前期の遺跡は丘陵傾斜地と上位河岸段丘の境や、里見台地、下位河岸段丘面に点在する。下里見上ノ原・中原遺跡（7）で住居跡が、上里見井ノ下遺跡（12）で土坑や埋甕が検出されている。堂尾根遺跡（8）や本遺跡（1）第1次調査でも土器片や石器が出土している。また、鳥川対岸では十文字台地に位置する日輪遺跡（16）で住居跡が検出されている。中期から晚期にかけての遺跡は下位河岸段丘面に分布がみられる。中期は本遺跡第2次調査で住居跡が検出されている。後期は本遺跡第4次調査で土器片が、晚期は中通遺跡（6）、中里見中川遺跡（10）、中里見根岸遺跡（11）で土器片や石器が出土している。

弥生時代 前期の遺跡はみられず、存在が確認できるようになるのは中期中葉の段階からである。中里見原遺跡（5）で再葬墓が1基、下里見上ノ原・中原遺跡で住居跡が1棟検出されるなど、里見台地上に遺跡が点在している。中期後半には本遺跡第4次調査で住居跡（報文中は竪穴建物跡と呼称、以下同様）2棟、



1. 下里見宮谷戸遺跡 1～4
2. 根岸遺跡
3. 相岸Ⅱ遺跡
4. 相岸Ⅲ遺跡
5. 中里見原遺跡
6. 中通遺跡
7. 下里見上ノ原・中原遺跡
8. 堂尾根遺跡
9. 二反田遺跡
10. 中里見中川遺跡
11. 中里見根岸遺跡
12. 上里見井ノ下遺跡
13. 道場遺跡
14. 道場Ⅲ遺跡
15. 本郷奥原遺跡
16. 日輪遺跡
17. 下里見源訪山古墳
18. 赤城山古墳
19. 堂尾根2号墳
20. 奥原53号墳
21. 的場E号墳
22. 本郷大塚古墳
23. 伊勢殿山古墳
24. 里見城
25. 小五郎砦
26. 大上島館
27. 高浜の砦

第3図 周辺の遺跡

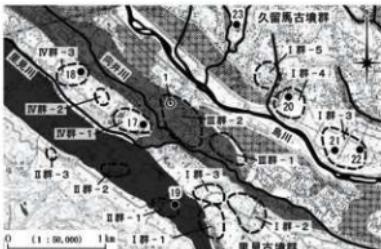
第3次調査で再葬墓の可能性がある土坑1基が確認され、下位河岸段丘面でも遺跡が認められるようになる。後期になると、烏川左岸の本郷台地上に遺跡が集中し展開する様子がみられる。これに対し、右岸で確認されるのは本遺跡（1）のみである。第3次調査で礫床墓4基、第4次調査で住居跡2棟が検出されている。

古墳時代 当該期の墓制をみると、弥生時代終末期～古墳時代初頭には方形周溝墓が確認されている。方形周溝墓は在地系の墓制ではなく、西からの影響を受けて出現した外来系の墳墓である。里見台地上の中里見原遺跡（5）で方形周溝墓が1基検出されており、その規模が大形であることから、外来系首長の墳墓の可能性が指摘されている。4世紀前半代には烏川左岸の本郷台地上に本郷大塚古墳（22：綜覽久留馬村第13号墳）が築かれ、榛名地域の古墳の築造はこの全長73mの前方後円墳をもって幕開けとなる。その後、烏川を挟んだ右岸の里見地区（里見古墳群）と左岸の本郷地区（久留馬古墳群）で、対峙するかのように古墳群が形成されていく。この嚆矢となったのが、6世紀前半代に築造された下里見諏訪山古墳（17：綜覽里見村第41号墳）や的場E号墳（21）である。里見古墳群は上位河岸段丘（里見II群）、里見台地（里見I・IV群）、下位河岸段丘（里見III・V群）に分布し、本遺跡周辺ではI～IV群が確認される。里見I群は平夷されてほとんど残っていない。里見II・III・V群は7世紀代の群集墳である。里見II群の堂尾根2号墳（19）は7世紀末の山寄せ円墳である。里見IV群は6世紀代に下里見諏訪山古墳や赤城山古墳（18：綜覽里見村第47号墳）が築造され、7世紀代に最も盛ん行する。なお、里見古墳群は現在のところ烏川右岸地域における古墳分布の上限域となる。

他方で、烏川左岸には7世紀後半の寺院跡と想定される本郷奥原遺跡（15）が立地する。7世紀後半でも早い時期に位置づけられる素弁四弁蓮華文軒丸瓦や、白鳳期の寺院である前橋市山王庵寺跡出土のものと同じ軒丸瓦の存在から、県内で最も早く造られた寺院の一つと考えられている。遺跡の西側には6～7世紀に形成された本郷奥原古墳群（久留馬古墳群I～4群）が隣接する。古墳群の中央には、群内最大規模の円墳である奥原53号墳（20）が位置する。本郷奥原遺跡の広がりと古墳群の分布をみると、寺院跡と古墳群は一線を画しており、計画的に造営された様子が看取される。

集落遺跡は、4世紀前半～5世紀前半代については、本遺跡第2・3次調査で4世紀後半および5世紀前半の住居跡が数棟が検出されているが、全体的に不明瞭である。5世紀後半代になると集落や住居軒数が増加する。右岸では下位河岸段丘面に集落が造営され、本遺跡第1～3次調査では多数の住居跡が検出された。このうち第1次調査の5号堅穴建物跡は一辺7mを超える大形で、初期須恵器を有するなど、他に対する優位性が窺われる。後期は里見台地上へと移り、6世紀代は下里見上ノ原・中原遺跡（7）で、7世紀代は中里見原遺跡で住居跡が検出されている。左岸では本郷台地上の道場Ⅲ遺跡（14）で中期後半～後期後半の住居跡が検出されている。日輪遺跡（16）は6世紀代に形成され、7世紀代に住居軒数が増加する集落で、前述した本郷奥原古墳群の背景にある集落と想定されている。

生産遺跡については、中里見中川遺跡（10）でAs-C下水田跡が検出されており、下位河岸段丘上の小河川周辺の低地で水田耕作が営まれていたと推測される。水田以外では、5世紀後半～6世紀にかけて鉄器生産関連の遺物が少量ながら確認されている。本遺跡第3次調査では、埋没の進行した5世紀前半代の住居跡



※古墳群の区分は『榛名町誌 資料編1 原始古代』から引用している。

第4図 周辺の古墳群

から金床が出土している。古墳からの出土例が多いなか、集落における初めての出土事例として注目される。

奈良・平安時代 奈良時代以降、律令地方制度において郡・郷制が整備されていく。榛名地域は前代の古墳群のまとまりが郡域の形成に繋がり、烏川右岸が碓氷郡（通説は片岡郡）、左岸が群馬郡に属していたと考えられる。集落遺跡は、右岸の中里見原遺跡（5）において8世紀末～10世紀後半にかけて継続する大規模集落が形成される。さらに、里見廃寺と想定される9世紀前半の基壇状建物跡も検出されており、採集遺物からは10世紀に比定される「佛」の墨書き土器や瓦なども確認されている。そのほか、上里見井ノ下遺跡（12）では9世紀前半および10世紀前半の住居跡が、中里見中川遺跡（10）および中里見根岸遺跡（11）で10世紀代の住居跡が、本遺跡（1）第1～4次調査で10世紀代～12世紀初頭の住居跡が検出されている。左岸の集落は、8世紀代の日輪遺跡（16）、9世紀前半の道場遺跡（13）、10世紀代の道場Ⅲ遺跡（14）など、本郷台地上に展開している。

生産遺跡については、As-B下の水田跡が下位河岸段丘を貫流する向井川や里見川のつくる低地部で検出されており、根岸遺跡（2）、根岸Ⅱ遺跡（3）、根岸Ⅲ遺跡（4）、中里見中川遺跡、中里見根岸遺跡で検出されている。As-B下の畠跡は本遺跡第1～3次調査や中通遺跡（6）で認められている。古墳時代から存在が知られる鉄生産関連遺跡は、平安時代になって数が増加する。中里見中川遺跡で製鉄炉2基、中里見根岸遺跡で10世紀後半頃の鍛冶炉1基が検出されている。中里見原遺跡の竪穴状遺構からは鉄滓・羽口が多く出土し、鉄生産に関わる遺構ないし残渣廢棄坑の可能性が指摘されている。鉄生産には燃料の炭が必要であるが、上里見井ノ下遺跡の台地西斜面で大型の炭窯5基が検出されている。また、里見丘陵南側の安中市秋間地区には県下最大規模を誇る秋間古窯跡群が存在する。7世紀初頭の操業と推定され、須恵器や瓦生産が行われていた。8～9世紀代には多くの支群が操業されており、二反田遺跡（9）はこの時期の支群のひとつである。

中近世 平安時代末期の院政時代になると、上野に数々の荘園が成立する。里見地区は「八幡荘」の一部であった可能性が高く、新田義重（上野国新田荘を本貫とする新田氏の祖）の子義俊が入部し、里見氏を称したという。里見氏の居館については明確でないが、方形館址として中里見字堀之内の里見館址、下里見字古城の里見城（24）という説がある。しかし、これについては否定的な見方が強く、前者は南北朝、後者は戦国期のものとみられている。上大島館（26）は矩形の方形館と考えられ、義俊の孫義基の子大島二郎為義がいたという説あるが確証はない。小五郎砦（25）は、鎌倉幕府を倒した立役者の一人である新田義貞の館址とされる。義貞は義俊六代の孫大炊介忠義の五男で、幼名を里見小五郎といったが、宗家新田朝氏の養子となって新田小太郎義貞を称したという説がある。

室町時代、関東管領を務める上杉氏は山内上杉氏と扇谷上杉氏に分裂して対立し、上野国は山内上杉氏の支配下となる。戦国期には、山内上杉家十五代当主の上杉憲政の配下として、長野葉政が榛名山東南麓の箕輪城に居城し、箕輪衆と呼ばれる在郷武士団をまとめ勢力を保っていた。永禄3年（1560）、上杉景虎（謙信）が上野に進出すると、これに呼応して本地域には西から武田信玄が侵攻し、永禄9年（1566）に箕輪城は落城する。高浜の砦（27）は箕輪城の支城で、信玄の箕輪城攻撃はこの砦の急襲から開始されたという。以後、箕輪城は武田氏の要城のひとつとなり、上杉氏との抗争の拠点となる。天正10年（1582）に武田氏が織田信長に滅ぼされると、信長腹心の滝川一益が上野に入る。しかし、同年の信長殺害後に一益は後北条氏との合戦に敗れ、上野はほぼ後北条氏に制圧された。天正18年（1590）、豊臣秀吉によって後北条氏が滅ぼされると、その領域は徳川家康に与えられた。同年の家康の関東入国に伴い、箕輪城には重臣の井伊直政が封じられ、榛名地域の村々はその支配下に組み入れられた。

III 調査の方法と経過

1 調査の方法

発掘調査では、試掘調査の結果に基づいて0.25m³バックホーにより表土掘削を実施した。その後、ジョレンを使用して、人力による遺構確認作業を行った。遺構は適宜土層観察用のベルトを設定し、移植ゴテ等を用いて掘削を行った。遺構測量は、平面図はトータルステーションを用い、断面図は手実測で測量した。測量に用いた基準点はGNSSによる観測で設置し、座標は世界測地系を使用した。遺構写真は、調査の進捗状況に応じて撮影し、35mm判のフィルムカメラ(FM2:モノクロ・カラーリバーサル)とデジタル一眼レフカメラNikonD5500(2416万画素)を使用した。空中写真はドローン(Dji Phantom3)にて撮影した。

整理作業では、遺構図面の修正を行い、第二次原図を作成した。出土遺物は、洗浄・注記後に溶剤系接着剤(セメダインC)を用いて接合し、必要に応じてエポキシ系樹脂で補強を行った。遺物写真はデジタル一眼レフカメラNikon D750で撮影した。遺構図・遺物実測図のトレース、写真的縮尺変更・トリミング、原稿執筆・編集にはそれぞれAdobe IllustratorCS2、Adobe PhotoshopCS2、Adobe InDesignCS2を使用した。

2 調査の経過

現地での発掘調査は2019年1月7日～2019年2月22日で実施した。

1月期 7日：近隣住民への挨拶および発掘器材の搬入を行う。8日：重機を搬入し、第1面の表土掘削を開始する。10日：発掘補助員を動員し、遺構確認作業を開始する。安全対策を講じる。12日：表土掘削および残土整形を終了し、重機を搬出する。15日：遺構確認作業を終了し、各遺構の調査に着手する。16日：基準点測量を実施し、BM杭を設置する。遺構掘削と並行して、随時、セクション・遺物出土状態・完掘状態の写真撮影および測量を行う。22日：第1面下の遺構の有無を確認するため、調査区中央の北・南壁際にトレチを設定して50～60cmほど掘り下げを行う。その結果、堅穴建物跡の床面と思われる硬化面および弥生時代の土器片が検出され、第1面の下に遺構が存在することが判明した。24日：基本層序の掘削を行う。25日：各遺構の平面図および調査区のコンタ測量を行う。28日：調査区の全体清掃を行い、ドローンによる空撮を行う。空撮後、堅穴建物跡の掘り方調査を行い、第1面の調査を終了する。29日：重機を搬入し、第2面までの掘削を開始する。31日：重機掘削および残土整形を終了し、重機を搬出する。

2月期 1日：第2面の遺構確認作業を行う。4日：BM杭の再設置を行う。各遺構の調査に着手し、並行して測量や写真撮影等の記録作業を行う。15日：各遺構の掘削を終了する。18日：第2面の全体清掃を行う。19日：第2面の空撮を行う。空撮後、各遺構の完掘写真撮影および調査区のコンタ測量を行う。20日：堅穴建物跡および井戸跡の掘り方調査を行う。21日：高崎市教育委員会による完了検査を実施する。22日：発掘器材の搬出を行い、現場作業を全て完了する。

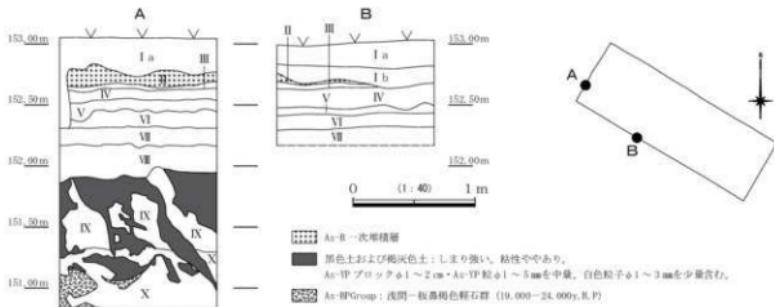
整理作業は、発掘調査終了後から2019年9月30日まで実施した。

3月期：遺物の洗浄・注記。遺構図面・写真的基礎整理。4月期：遺物の接合・復元・選別。5月期：遺物の写真撮影。遺物写真の縮尺変更・トリミング。6月期：遺物実測。遺構第二次原図の作成。7月期：遺物実測図トレース。8月期：図版作成、原稿執筆、編集作業。入稿。9月期：報告書の校正、印刷・製本。

IV 基本層序

基本層序は調査区北西壁（A）および南西壁（B）で確認した（第5図／P.L. 10）。I a・I b層は現代の整地土層でAs-Aを含む。II層はAs-B一次堆積層で、最下位に灰色火山灰が薄く堆積している。III層は黒褐色土層でAs-B下の旧地表面である。II・III層は調査区の大半でI層に削平されており、北西と南東の壁際で部分的に確認されるのみである。そのため、今回の調査区ではAs-B下の遺構は残存していない。IV層はAs-C混入黒褐色土層、V層はAs-C混入灰黃褐色土層、VI層はAs-C混入黒色土層である。VII層はAs-C混入灰黃褐色土層で、弥生時代の遺物を包含する。VIII層はにぶい黄褐色ローム土層である。IX層は明黃褐色As-YP層、X層は灰褐色粘質土層である。遺構確認面は第1面をVI層上面、第2面をVII層上面とした。

IX・X層は堆積が乱れており、黒色土や褐灰色土が斜めの筋状やブロックとして入り込んでいた。X層中にはAs-B Groupのブロックも確認された。このような様相は調査区全体に及んでいる。株式会社火山灰考古学研究所の早田勉氏に実見していただく機会を得、地層の乱れは地震による地滑りの可能性があり、間にに入る黒色土は繩文時代後晩期に比定されるのではないかとの所見をいただいた。



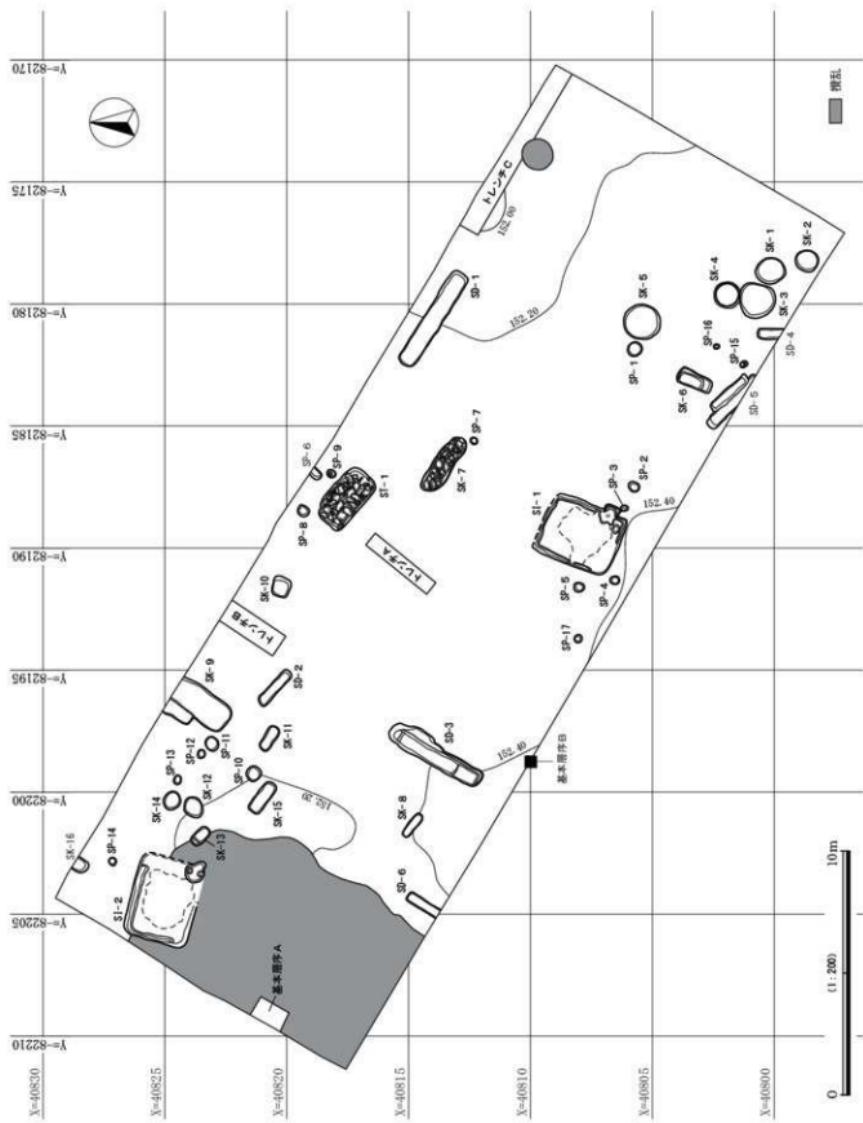
基本層序

- I a. 黒褐色土 $7.5\text{mR}1/2$ ：しまり硬い。粘性やや弱い。As-A $\phi 1~5\text{mm}$ を多量含む。石・木くず・ゴミなどがある。現代の整地土層。
- I b. 黒褐色土 $7.5\text{mR}1/1$ ：しまり硬い。粘性やや弱い。As-A $\phi 1~3\text{mm}$ を多量含む。現代の整地土層。
- II. As-B一次堆積層：しまり・粘性弱い。下位に薄く灰色火山灰が確認される。
- III. 黑褐色土 $7.5\text{mR}3/2$ ：しまりあり。粘性やや弱い。As-B下の旧地表面。上位に鉛分が沈着。
- IV. 黑褐色土 $7.5\text{mR}3/1$ ：しまり・粘性やや弱い。As-B $\phi 1~3\text{mm}$ を中量含む。
- V. 灰黃褐色土 $10\text{mR}4/2$ ：しまり・粘性やや弱い。As-C $\phi 1~3\text{mm}$ を少量含む。
- VI. 黑色土 $10\text{mR}2/1$ ：しまり・粘性やや弱い。As-C $\phi 1~3\text{mm}$ を多量含む。As-W $\phi 1~2\text{mm}$ を微量含む。遺物包含層。
- VII. 灰黃褐色土 $10\text{mR}2/2$ ：しまり・粘性やや弱い。As-C $\phi 1~2\text{mm}$ を多量含む。炭化物粒 $\phi 1~2\text{mm}$ を微量含む。ローム層。
- VIII. にぶい黄褐色土 $10\text{mR}1/3$ ：しまり・粘性弱い。白色粒子 $\phi 1~5\text{mm}$ を多量含む。白色粒子 $\phi 1~3\text{mm}$ を中量含む。ローム層。
- IX. 明黃褐色土 $10\text{mR}6/6$ ：しまり硬い。粘性やや弱い。白色粒子 $\phi 1~2\text{mm}$ を多量含む。As-YP層。
- X. 黑褐色粘質土 $5\text{mR}6/2$ ：しまり強い。粘性あり。白色粒子 $\phi 1~2\text{mm}$ を少量含む。

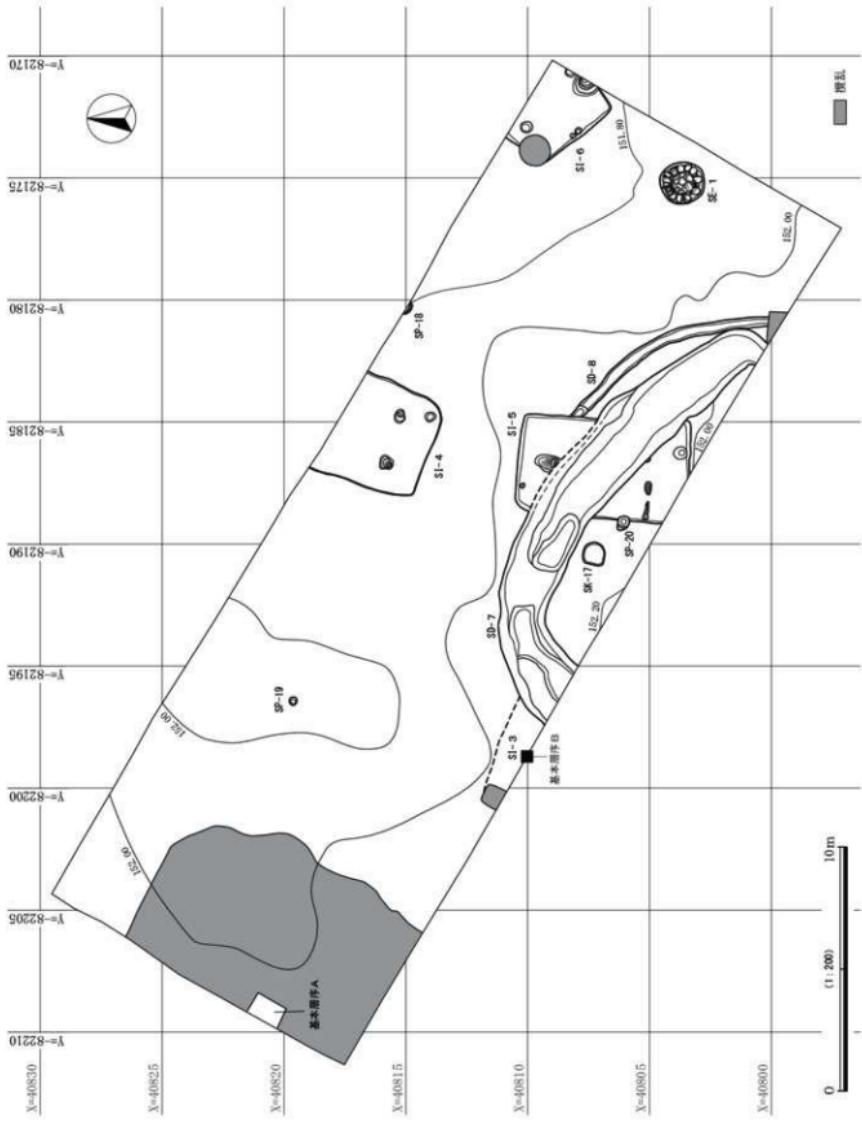
第5図 基本層序

V 検出された遺構と遺物

今回の調査では2面にわたり遺構を確認した。第1面では、平安時代の竪穴建物跡2棟、古墳時代～平安時代の配石遺構1基、近世の溝跡6条、中近世の土坑16基、古墳時代および中近世のピット17基を検出した（第6図）。第2面では、弥生時代の竪穴建物跡4棟、古墳時代の溝跡2条、近世の井戸跡1基、古墳時代～平安時代の土坑1基、古墳時代のピット3基を検出した（第7図）。以下、遺構ごとに記載する。



第6図 第1面全体図

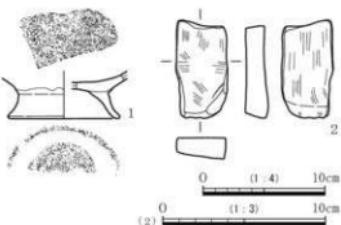


第7図 第2面全体図

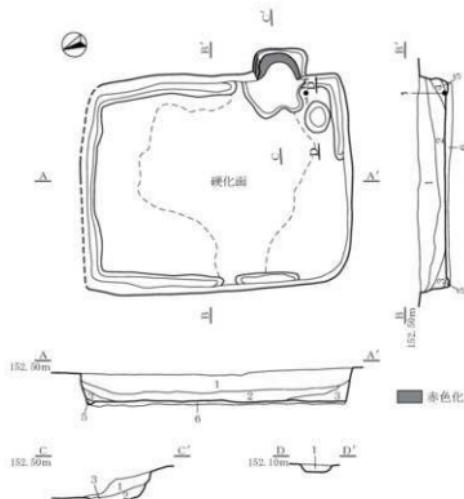
1 穴室建物跡

1号竪穴建物跡（第8・9図、第1表／P.L. 2・10）

位置:X=40810～40807,Y=82192～82188。重複関係:5号竪穴建物跡、7号溝跡、17号土坑、20号ビットと重複し、本遺構が新しい。平面形態:南北方向に長い隅丸長方形を呈する。規模:長軸3.33m、短軸2.67m、確認面からの深さ37cm。主軸方位:N-115°-E。埋没状況:覆土はAs-C・炭化物粒を含むにぶい黄褐色～褐灰色土を主体とし、自然埋没と想定される。床面の状態:平坦である。床面は全体的に縮まっており、カマド前から竪穴中央にかけて顕著な硬化面が認められた。カマド:東壁の南寄りに付設される。カマドは壊されており、形態や構築材などは不明である。主軸は竪穴と同方位を指す。全長は84cmを測る。煙道部側の壁面は被熱により赤色化している。柱穴:認められない。貯藏穴:カマドの右脇、竪穴の南東コーナー部に位置する。椭円形を呈し、断面形態は浅い逆台形を呈する。規模39cm×31cm、深さ9cmを測る。壁周溝:カマド部分および南壁の西半分を除いて検出された。西壁下では一ヵ所切れる部分がある。幅8～16cm、深さ3～5cmを測る。掘り方:全面に貼床が認められる。貼床は灰褐色土を主体とし、厚さは4～9cmである。掘り方の底面には凹凸がみられる。遺物出土状況:覆土中から土器師器、須恵器碗の破片が少量出土している。床面直上から出土した遺物は、カマド右脇の須恵器碗(1)のみである。土器以外では、竪穴北東部の覆土中から砥石(2)が出土している。時期:10世紀後半。



第8図 1号竪穴建物跡出土遺物



第9図 1号竪穴建物跡

S I-1 A-A'・B-B' 土層説明

1. にぶい黄褐色土 10YR5/3: しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を多量。ローム粒を少量。炭化物粒 ø 0.5～1cm を微量含む。
2. 褐灰色土 10YR4/1: しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を多量。ローム粒を中量。炭化物粒 ø 2～3mm を少量含む。
3. 黑褐色土 10YR3/1: しまりやや弱い。粘性やや弱い。As-C・ローム粒・ロームブロック ø 2～3cm を微量含む。
4. にぶい黄褐色土 5YR5/4: しまりややあり。粘性やや弱い。As-C・ローム粒・炭化物粒 ø 1～5mm・純土粒 ø 1～5mm を少量含む。
5. 黑褐色土 10YR3/1: しまり・粘性やや弱い。As-C を多量。ローム粒を中量含む。堅刺層。
6. 黑褐色土 7.5YR1/2: しまりあり。粘性やや弱い。As-C を多量。ローム粒・黑褐色土を少量含む。粗り層。

S I-1 C-C' 土層説明

1. 黄褐色土 10YR4/2: しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を多量。ローム粒・純土粒 ø 1～3mm を中量。炭化物粒 ø 1～2mm を少量含む。
2. 黑褐色土 10YR1/1: しまりややあり。粘性やや弱い。純土粒 ø 1～3mm を多量。As-C・炭化物粒 ø 1～2mm を少量含む。
3. 黑褐色土 10YR1/1: しまり・粘性やや弱い。As-C・純土粒 ø 1～3mm を多量。炭化物粒 ø 1～2mm を少量含む。

S I-1 D-D' 土層説明

1. 黑褐色土 10YR1/1: しまり・粘性やや弱い。As-C を多量。ローム粒・炭化物粒 ø 1～5mm を少量含む。

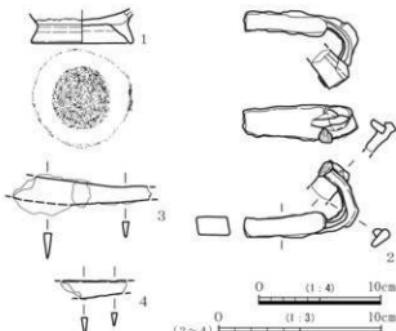


第1表 1号竪穴建物跡出土遺物観察表

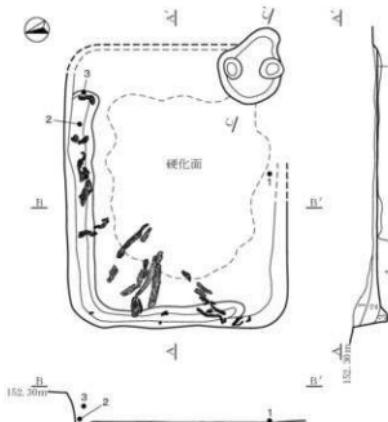
| 番号 | 器種 | 法量(cm) | ①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 | 成・整形技法の特徴 | | 出土位置/備考 |
|----|----------|--------------------------------------|---|---------------------------------|--------------------|---------|
| | | | | 外側: ロクロナデ。底面回転式切り、高台附付時に周縁回転ナデ。 | ()は推定値。[]は残存値を表す | |
| 1 | 須恵器 鏡 | 口径: - 底径: 9.2 器高: [3.9] | ①還元焰(焼成不良) ②内外: ぶい黄褐色 ③角閃石、白色粘 ④底部・高台部 1/3 | | | 南東部床面直上 |
| 2 | 砥石 | ①長さ: 6.0、最大幅: 3.2、最大厚: 1.4、重さ: 42.01 | ②材質 ③残存 ④成・整形技法の特徴 | | | 出土位置/備考 |
| | | ③流紋岩 | ③完形 ④4面使用。表面は非常に平滑。 | | | 北東部覆土中 |

2号竪穴建物跡（第10・11図、第2表／PL. 2・10）

位置: X=40827 ~ 40824、Y=82207 ~ 82203。重複関係: なし。南東側は現代の擾乱に壊される。平面形態: 東西方向に長い隅丸長方形を呈する。竪穴の南東側が擾乱で壊されていたため推定プランとなる。規模: 長軸推定 3.48 m、短軸 2.72 m、確認面からの深さ 36 cm。主軸方位: N - 105° - E。埋没状況: 覆土は As-C・炭化材を多量に含むにぶい黄褐色土を主体とし、自然埋没と想定される。北・西壁際から竪穴中央へ向かって、斜めに落ち込むように炭化材が出土しており、屋根材の垂木と推測される。床面の状態: 平坦である。床面は全体的に締まっており、カマド前から竪穴中央にかけて顕著な硬化面が認められた。カマド: 東壁の南コーナー部に付設される。カマドは壊されており、形態や構築材は不明である。小穴が 2 カ所確認されており、袖石等などの構築材を抜き取った痕跡と推測される。主軸方位は N - 133° - E を指す。全長は 98 cm を測る。柱穴: 認められない。貯藏穴: 認められない。壁周溝: 北壁および西壁下で検出された。幅 12 ~ 31 cm、深さ 5 ~ 9 cm を測る。掘り方:



第10図 2号竪穴建物跡出土遺物



第11図 2号竪穴建物跡

S 1-2 A-A' 土層説明

1. にぶい黄褐色土 10YR 3/2: しまりややあり。粘性やや弱い。炭化材を多量、As-C・ローム粒を少量含む。
2. にぶい黄褐色土 10YR 4/3: しまりやややや。粘性やや弱い。炭化材を多量、ロームブロック $\phi 0.5 \sim 1$ cm を中量、As-C を少量含む。
3. 黒褐色土 10YR 2/1: しまり・粘性やや弱い。As-C・ローム粒を少量含む、堅固。
4. 黑褐色土 10YR 2/2: しまり硬い。粘性やややや。As-C・ロームブロック $\phi 1 \sim 10$ cm を多量。炭化物粒 $\phi 1 \sim 2$ mm を少量含む。掘り方。

S 1-2 C-C' 土層説明

1. 黄褐色土 10YR 4/1: しまりややや。粘性やや弱い。ローム粒を多量、堆積粒 $\phi 1 \sim 2$ mm、炭化物粒 $\phi 1 \sim 2$ mm、As-C を少量含む。



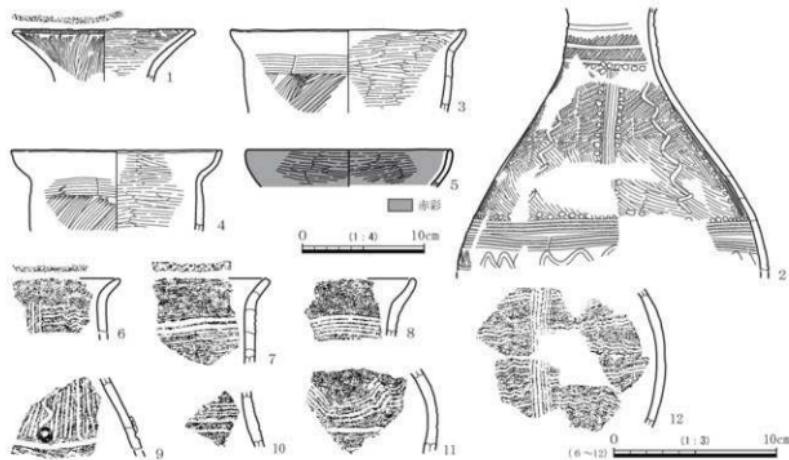
全面に貼床が認められる。貼床は黒褐色土を主体とし、厚さは2~7cmである。掘り方の底面は凹凸がみられる。西壁下は土坑状に30cmほど深く掘り込まれている。遺物出土状況：覆土中から土師器壺、須恵器壺、碗の破片、鉄製品が少量出土している。床面直上の遺物として、南壁際から出土した須恵器碗（1）がある。鉄製品（2~4）は北・西壁際から炭化材とともに出土している。時期：10世紀後半。備考：焼失住居。

第2表 2号竪穴建物跡出土遺物観察表

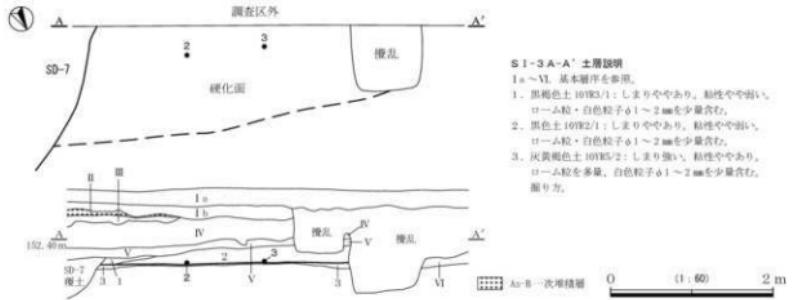
| 番号 | 器種 | 法量(cm) | 成・整形技法の特徴 | | | 出上位置/備考 |
|----|----------|------------------------------|--|--|--------|---------|
| | | | ①焼成 | ②色調 | ③胎土 | |
| 1 | 須恵器 壺 | 口径：一 底径：(8.3) 器高：[2.7] | ①酸化焰 ②外：にぶい緑、内：灰 黄褐色 ③石英、チャート、白色粒 ④高台部 3/4 | 外面：ロクロナデ。底面転台に周 縁回転ナデ。 内面：ロクロナデ。 | | 南東部床面上 |
| 番号 | 器種 | 法量(cm g) | ①法量(cm g) | ②材質 | ③残存 | 出上位置/備考 |
| 2 | 不明品 | | ①長さ：7.1、最大幅：2.3、最大厚：1.1、重さ：62.47 | ②鉄製、木質 | ③ほぼ完形 | 北東部壁際下層 |
| 3 | 刀子 | | ①長さ：[8.5]、最大幅：2.5、最大厚：0.4、重さ：15.41 | ②鉄製 | ③端部欠損 | 北東部壁際中層 |
| 4 | 刀子 | | ①長さ：[4.0]、最大幅：1.2、最大厚：0.3、重さ：3.02 | ②鉄製 | ③両端部欠損 | 北東部下層 |

3号竪穴建物跡（第12・13図、第3表／P.L. 3・10）

位置：X=40812~40810、Y=-82201~-82197。重複関係：7号溝跡と重複し、本遺構が古い。西側は現代の擾乱に壞される。南側は調査区外となる。平面形態：床面の硬化範囲を検出したのみで、平面形態は不明である。規模：調査区内で検出された硬化面の範囲は長軸4.20m、短軸1.44m。主軸方位：不明。埋没状況：覆土は黒色土を主体とし、自然埋没と想定される。床面の状態：平坦で、顕著な硬化面が認められた。炉・柱穴・貯蔵穴：調査区内では認められない。壁周溝：認められない。掘り方：貼床が認められる。貼床は灰黄褐色土を主体とし、厚さは2~6cmである。掘り方の底面はやや凹凸がみられる。遺物出土状況：覆土中から弥生土器の壺・甌・鉢の破片が少量出土している。床面直上の遺物として、2の壺と3の甌がある。時期：弥生時代中期後半。



第12図 3号竪穴建物跡出土遺物



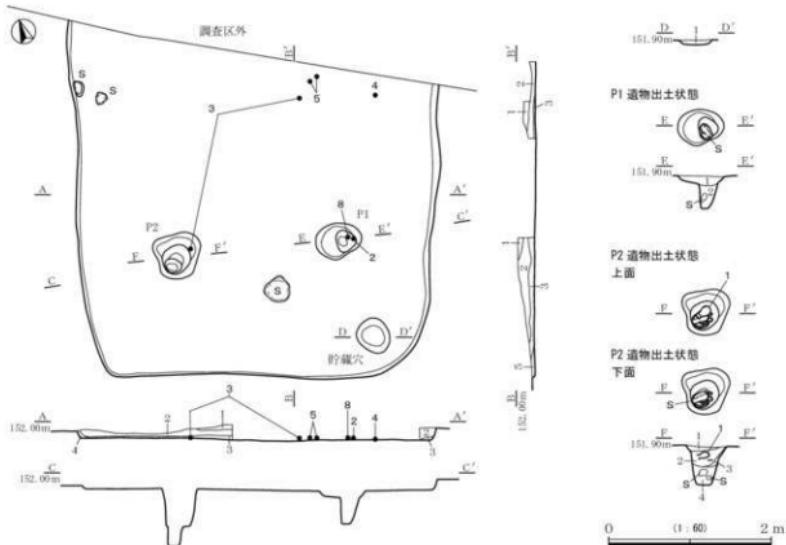
第 13 図 3 号竪穴建物跡

第 3 表 3 号竪穴建物跡出土遺物観察表

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | ①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 □径: (15.0) 底径: — 器高: [4.2] □縫部 1/6 | 成・整形技法の特徴 ①良好 ②外にぶい楕 内: ぶい楕 ③黒色粒、赤褐色粒 ④縫部 | 出土位置/備考 東部覆土中 |
|----|-------------|--|--|--|---------------------------------------|
| 1 | 弥生土器 壺 | □径: (15.0) 底径: — 器高: [4.2] □縫部 1/6 | ①良好 ②外にぶい楕 内: ぶい楕 ③黒色粒、赤褐色粒 ④縫部 | 外面: 口部に単節 R L 繩文。縫部横ナデ後、竪方向のミガキ。 内面: 縫部横ナデ後、横方向のミガキ。 | 東部床面上+ 東部覆土中/内面は所々に小凹 形状の剥離跡あり。 |
| 2 | 弥生土器 壺 | □径: (21.4) 底径: — 器高: [21.4] □縫部上半 3/4 | ①良好 ②外にぶい楕 内: オリーブ 黒 ③チャート、白色粒 ④縫部~胴部上半 3/4 | 外面: 頭部ナデ→単節 L R 繩文を横位施文→横位沈線文 3 条以上。胴部上位は斜方向のハケメ→単節 L R 繩文を横位施文→斜方向のミガキ→4 条 1 単位の縫部横ナデを 5 条を縛波状直線文を 5 条。胴部中位はナデ→4 条 1 単位の縫部直線文→縫部直線文との間に波状沈線文。頭部の沈線文・縫波状直線文・縫部直線文の脇を並行する竹質状工具による刺突文。 内面: 頭部横方向のナデ。胴部上~中位は横・斜方向のハケメ。 | 東部床面上+ 東部覆土中/内面は所々に小凹 形状の剥離跡あり。 |
| 3 | 弥生土器 壺 | □径: (19.3) 底径: — 器高: [6.8] □縫部~胴部上位 | ①普通 ②内外にぶい楕 ③白色 粒、黒色粒 ④縫部~胴部上位 | 外面: □縫部横ナデ。頭部 6 条 1 単位の縫部直線文。胴部上位 3 ~ 4 条 1 単位の縫部斜状文。 内面: □縫部~縫部上位横方向のミガキ。 | 西部床面上/ 外面・内面口縫上 端部にスッ付着。 |
| 4 | 弥生土器 壺 | □径: (17.2) 底径: — 器高: [6.6] □縫部上位破片 | ①良好 ②外: 植、内: ぶい黄 植 ③白色粒、黒色粒 ④縫部~胴 部上位破片 | 外面: 受け口口縫、□縫部横ナデ。頭部 6 条 1 単位の縫部直線文。胴部上位 5 ~ 6 条 1 単位の縫部斜格子 目文。 内面: □縫部~胴部上位横方向のミガキ。 | 東部覆土+外面 スス、内面コゲ 付着。 |
| 5 | 弥生土器 鉢 | □径: (16.8) 底径: — 器高: [3.0] □縫部 1/8 | ①良好 ②外: 赤褐 ③チャ ート、白色粒 ④縫部 1/8 | 外面: □縫部横方向のミガキ。赤彩。 内面: □縫部横方向のミガキ。赤彩。 | 覆土一括 |
| 6 | 弥生土器 壺 | □径: — 底径: — 器高: — □縫部~頭部破片 | ①普通 ②内外にぶい黄 植 ③石英、角閃石、チャート、褐色 粒 ④□縫部~頭部破片 | 外面: □縫部横ナデ。頭部 1 単位 4 条以上の縫部重下文→1 単位 6 条以上の縫部波状 文。 内面: □縫部横ナデ。頭部横方向のハケメ。 | 東部覆土中 |
| 7 | 弥生土器 壺 | □径: — 底径: — 器高: — □縫部~頭部破片 | ①良好 ②外にぶい楕、内: 灰褐 ③石英、チャート、白色粒、黑色 粒 ④□縫部~頭部破片 | 外面: □縫部横ナデ。頭部横ナデ。頭部横 方向のハケメ→4 条 1 単位の縫部直線文。 内面: □縫部~頭部横方向のハケメ→横・斜方向のミガ キ。 | 東部覆土中 |
| 8 | 弥生土器 壺 | □径: — 底径: — 器高: — □縫部破片 | ①普通 ②内外にぶい黄 植 ③石英、チャート、白色粒、小砾 ④□縫部~頭部破片 | 外面: □縫部横ナデ。頭部 5 条 1 単位の縫部直線文。 内面: □縫部横方向のハケメ→横方向の細いミガキ。頭 部ハケメ→横方向の密で丁寧なミガキ。 | 東部覆土中 |
| 9 | 弥生土器 壺 | □径: — 底径: — 器高: — □縫部破片 | ①普通 ②外: 植、内: ぶい植 ③石英、角閃石、チャート、白色 粒 ④縫部破片 | 外面: 横位沈線文の上は 6 条 1 単位の縫部重下文→縱 波状沈線文→円形斜剖文→點狀文の中央を竹質状工 具により刺突。下は斜方向のハケメ→波状沈線文。 内面: 斜方向のハケメ。 | 西部上層 |
| 10 | 弥生土器 壺 | □径: — 底径: — 器高: — □縫部破片 | ①普通 ②外にぶい黄 植 ③石英、チャート、白色粒、 黒色粒 ④縫部破片 | 外面: ハケメ→横位沈線文の上は 6 条 1 単位の縫部直 線文→細い竹質状工具による円形刺突文。下はミガキ。 内面: 横・斜方向のハケメ。 | 覆土上層 |
| 11 | 弥生土器 壺 | □径: — 底径: — 器高: — □縫部破片 | ①良好 ②外にぶい黄 植 ③石英、チャート、白色粒 ④縫部破片 | 外面: 横位沈線文の上に 5 条 1 単位の縫部直線文。 内面: 横・斜方向のハケメ。 | 覆土上層 |
| 12 | 弥生土器 壺・甕 | □径: — 底径: — 器高: — □縫部破片 | ①普通 ②内外にぶい黄 植 ③石英、チャート、白色粒 ④縫部破片 | 外面: 横・斜方向のハケメ→5 条 1 单位の縫部波状文→ 5 条 1 单位の縫部直線文。 内面: 斜方向のハケメ→縫・斜方向のミガキ。 | 東部覆土中/外 面スス、内面コ ゲ付着。 |

4号堅穴建物跡（第14・15図、第4・5表／P.L. 3・11）

位置：X=40819～40814、Y=-82188～-82184。重複関係：1号配石遺構、7号土坑、6・9号ピットと重複し、本遺構が古い。平面形態：南北方向に長い隅丸長方形を呈すと推定される。北側は調査区外となる。規模：調査区内での長軸4.27m、短軸4.54m、確認面からの深さ16cm。主軸方位：N-21°-E。埋没状況：覆土は炭化物粒を含む黒褐色土を主体とし、自然埋没と想定される。床面の状態：平坦である。床面は全体的に締まっているが、顯著な硬化面は確認されない。炉：調査区内では認められない。柱穴：調査区内で2本検出された。P1・2は主柱穴で、4本主柱構造と想定される。P1は梢円形を呈し、規模57cm×44cm、深さ40cmを測る。下層から安山岩が1点出土している。P2は不整な隅丸方形を呈し、規模59cm×56cm、深さ70cmを測る。下層から安山岩が6点まとめて出土している。貯蔵穴：堅穴の南東コーナー部に位置する。平面形は梢円形で、断面形態は浅い逆台形を呈する。規模44cm×37cm、深さ5cmを測る。壁周溝：



S 1-4 A-A'・B-B' 土層説明

1. 黒褐色土(10R3/2): しまり。粘性ややあり。ローム粒を中量含む。
2. 黒褐色土(10R3/2): しまり。粘性ややあり。ローム粒を中量。炭化物粒φ1～5mm・ロームブロックφ3～5cmを少量含む。
3. 黑褐色土(10R3/2): しまり。粘性ややあり。ローム粒を中量。炭化物粒φ1～5mmを少量含む。
4. 黑褐色土(10R3/2): しまり。粘性ややあり。ローム粒・炭化物粒φ1～5mmを少量含む。
5. ぶい黄褐色土(10R8/3): しまり。粘性ややあり。黒褐色土を多量含む。

S 1-4 D-D' 土層説明

1. 黑褐色土(10R3/2): しまりやや強。粘性ややあり。ロームブロックφ3～5cm・褐色土ブロックφ3～5cmを中量含む。

S 1-4 E-E' 土層説明

1. 黑褐色土(10R3/2): しまり。粘性ややあり。ロームブロックφ1～3cmを中量。ローム粒・白色粒子を少量含む。
2. 黑褐色土(10R3/2): しまり。粘性ややあり。ローム粒を多量含む。

S 1-4 F-F' 土層説明

1. 黑褐色土(10R3/2): しまり。粘性ややあり。ローム粒・炭化物粒φ1～5mm・白色粒子を少量含む。
2. 黑褐色土(10R3/2): しまり。粘性ややあり。ローム粒・白色粒子を少量含む。
3. 黑褐色土(10R2/1): しまり。粘性ややあり。ロームブロックφ1～2cmを少量。ローム粒・白色粒子を微量含む。
4. 黑褐色土(10R1.7/1): しまり。粘性ややあり。

第14図 4号堅穴建物跡

認められない。掘り方：明確な貼床は認められない。遺物出土状況：覆土中から弥生土器の壺・甕・台付甕・高环が少量出土している。床面直上の遺物として、2～5の壺、8の台付甕がある。1の小形壺はP 2の上層から横位で出土している。時期：弥生時代中期後半。



第15図 4号竖穴建物跡出土遺物

第4表 4号竖穴建物跡出土遺物観察表（1）

()は推定値。[]は残存値を表す

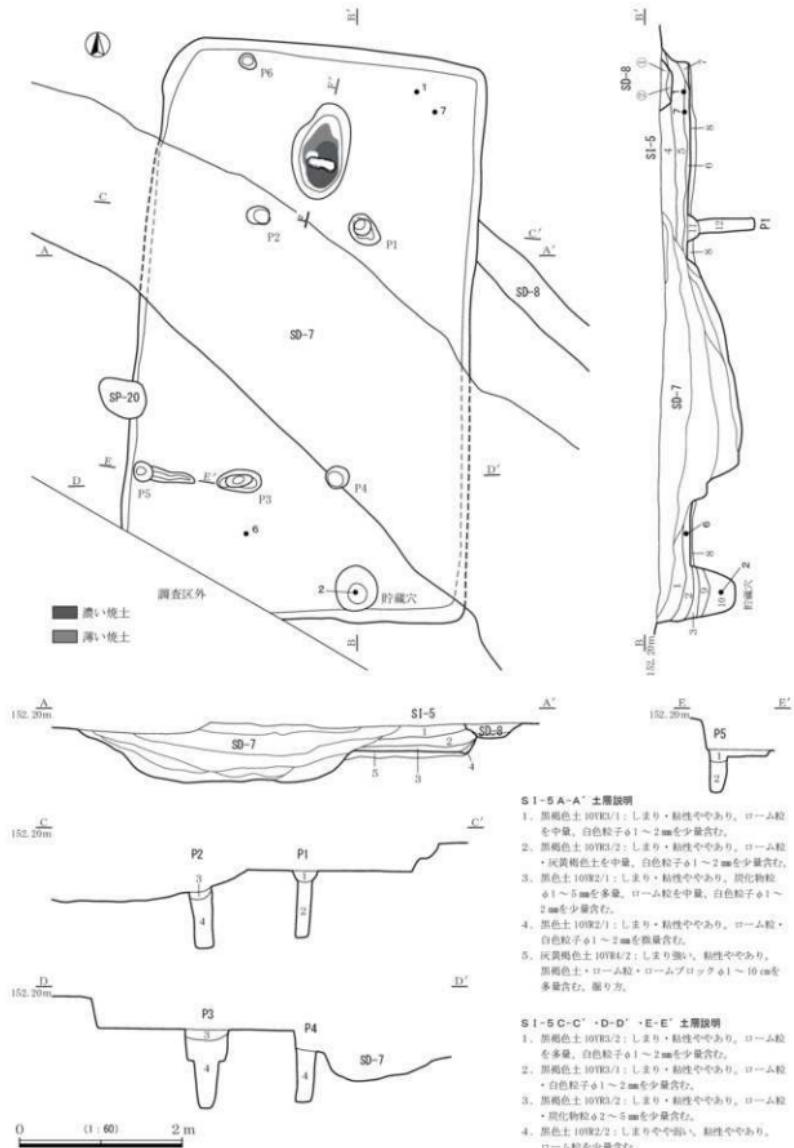
| 番号 | 器種 | 法量(cm) | ①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 | 成・整形技法の特徴 | 出土位置／備考 |
|----|-------------|----------------------------------|---|--|--------------------|
| 1 | 弥生土器 小形壺 | 口径: 7.2 底径: 5.2 器高: 17.4 | ①良好 ②青・白・内にぶい黄粒 ③石英、チャート、白色粒、黒色粒 ④口縁部一部欠損 | 外側: 口縁部に単縦L R 繩文、口縁部斜方向のハケメ→横方向のナデ、頭部横沈線文。胸部上～中位窓・斜方向のハケメ→腹方向のミガキ。胸部下位横方向のハケメ。底部ケズリーナデ。 内側: 口縁部横ナデ。胸部ハケメ。底部ナデ。 | P 2上層 |
| 2 | 弥生土器 壺 | 口径: (13.6) 底径: — 器高: [9.7] | ①普通 ②内外: 椿 ③石英、チャート、金雲母、黒色粒、褐色粒 ④口縁部 1/3、頸部 4/5 | 外側: 口縁部に単縦L R 繩文、口縁部斜方向のハケメ→上位は横方向のナデ後ミガキ、下位は単縦L R 繩文を横位施文、頸部2条の横位沈線文による区画内に単縦L R 繩文を横位施文→波状沈線文と横位沈線文。区画の下は斜方向のハケメ。 内側: 口縁部横方向のナデ→横方向のミガキ。頭部横・斜方向のハケメ・ナデ。 | 南東部床面直上 +南東部覆土中 |

第5表 4号竪穴建物跡出土遺物観察表(2)

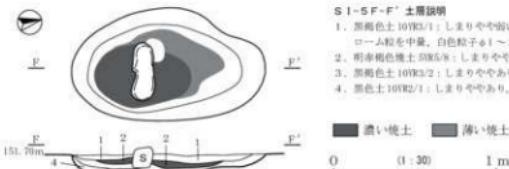
| 番号 | 器種 | 法量(cm) | ①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 | 成・整形技法の特徴 | | ()は推定値。[]は残存値を表す |
|----|-------------|-------------------------------|---|--|--------------------------------------|--|
| | | | | 外面部:口縁部横ナデ→縱方向のハケメ。腹部は横位沈線文4条で3段の帯状区画一区画内に単節L.R.縦文を充填→上段と下段に波状沈線文。胸部中位は横位沈線文による帯状区画内に単節L.R.縦文を横位施文→山形沈線文→縦長粘土を貼付。小孔が複数。区画の下はハケメ→ナデ→連續施文。 | 内面部:器表面創離により調整不明。 | |
| 3 | 弥生土器 壺 | 口径:(13.6) 底径:- 器高:- | ①良好 ②外:にぶい褐、内:オリーブ黒 ③海面滑剣、金雲母、チャート、白色粒、黒色粒 ④口縁部4/5、頭部破片、胸部中位1/3 | 外面部:口縁部横ナデ→縱方向のハケメ。腹部は横位沈線文4条で3段の帯状区画一区画内に単節L.R.縦文を充填→上段と下段に波状沈線文。胸部中位は横位沈線文による帯状区画内に単節L.R.縦文を横位施文→山形沈線文→縦長粘土を貼付。小孔が複数。区画の下はハケメ→ナデ→連續施文。 | 内面部:器表面創離により調整不明。 | 南東部床面直上 +北東部床面直上 +上層/囲上復元。 |
| 4 | 弥生土器 壺 | 口径:7.6 底径:[16.1] 器高:- | ①良好 ②外:にぶい黄褐、内:石英、チャート、白色粒、黒色粒 ④胸部1/4、底部1/2 | 外面部:胸部中位は5条1單位以上の櫛描直線文→2条の横位沈線文による帯状区画内に6条1單位の櫛描条文工具による列文→4条1單位の櫛描直線文→横位沈線文。胸部下位は斜方方向のハケメ→横・斜方方向のミガキ→下端部横方方向のケリズ。底部ナデ。 | 内面部:胸部中位は横方方向のナデ。胸部下位は斜方方向のハケメ。底部ナデ。 | 北東部床面直上 +北東部床面直上 +上層/囲上復元。内面は小円形容の剥離痕あり。 |
| 5 | 弥生土器 壺 | 口径:- 底径:[9.6] 器高:- | ①良好 ②外:にぶい黄褐、内:灰 ③白色粒、黒色粒 ④胸部破片 | 外面部:斜方方向のハケメ→縱方方向のミガキ。太掘沈線文で区画した内部に、5~6条1單位の櫛描垂下文を左から右の順で施文。区画の一部には赤彩を施す。下に横位沈線文3条以上。 | 内面部:斜方方向のナデ→横方方向のナデ。 | 北東部床面直上 +北東部上層+囲上一括 |
| 6 | 弥生土器 壺 | 口径:(12.4) 底径:- 器高:[2.2] | ①普通 ②外:灰褐褐、内:橙 ③白色粒 ④口縁部1/3 | 外面部:口脇部に単節L.R.縦文。口縁部摩耗のため調整不明。 | 内面部:口縁部摩耗のため調整不明。 | 西北部覆土中 |
| 7 | 弥生土器 壺 | 口径:(11.0) 底径:- 器高:[2.7] | ①普通 ②外:にぶい黄褐、内:灰 ③石英、白色粒、黒色粒、白色砂 ④口縁部1/4 | 外面部:口縁部横・斜方方向のハケメ・ナデ。 | 内面部:口縁部横・斜方方向のハケメ・ナデ→横方方向のミガキ。 | 覆土一括 |
| 8 | 弥生土器 台付甕 | 口径:- 底径:5.9 器高:[3.0] | ①普通 ②外:明赤褐、内:明褐 ③チャート、白色粒、黒色粒 ④右部3/4 | 外面部:台部横ナデ→縱・横方方向のナデ。 | 内面部:台部ナデ。 | 南東部床面直上 +覆土一括 |
| 9 | 弥生土器 壺 | 口径:- 底径:- 器高:- | ①普通 ②内面部:にぶい黄褐 ③石英、白色粒、黒色粒 ④口縁部破片 | 外面部:受け口状口縁。口脇部に単節L.R.縦文。口縁部単節L.R.縦文を単位施文→波状沈線文。頭部横方方向のナデ。 | 内面部:口縁部横方方向のハケメ・ナデ。 | 南東部床面直上 |
| 10 | 弥生土器 壺 | 口径:- 底径:- 器高:- | ①良好 ②内外:灰褐 ③チャート、白色粒、黒色粒、小礫 ④口縁部破片 | 外面部:口脇部に単節L.R.縦文。口縁部横ナデ。頭部櫛描横文。 | 内面部:横ナデ→横方方向のミガキ。 | 西北部覆土中 |
| 11 | 弥生土器 壺 | 口径:- 底径:- 器高:- | ①良好 ②外:黒褐、内:にぶい赤褐 ③チャート、白色粒 ④口縁部破片 | 外面部:頭部横沈線文。頭部単節L.R.縦文を単位4条以上の櫛描直線文。 | 内面部:口縁部横ナデ→横方方向のミガキ。 | 西北部覆土中 |
| 12 | 弥生土器 壺 | 口径:- 底径:- 器高:- | ①良好 ②内面部:にぶい褐 ③石英、角閃石、白色粒 ④胸部破片 | 外面部:頭部横沈線文。頭部単節L.R.縦文を単位4条以上の櫛描直線文。 | 内面部:頭部横ナデ→横方方向のミガキ。 | 上層 |
| 13 | 弥生土器 壺 | 口径:- 底径:- 器高:- | ①普通 ②外:浅黄褐、内:にぶい黄褐 ③石英、チャート、黒色粒 ④腹部破片 | 外面部:斜方方向のハケメ→横位沈線文の上に1單位3条以上の櫛描波状文。下は縦位沈線文による縱方方向の区画内に、縦波状沈線文と4条1單位の櫛描縦波状文を交互に施文。 | 内面部:斜方方向のハケメ・ナデ。 | 上層 |
| 14 | 弥生土器 壺 | 口径:- 底径:- 器高:- | ①良好 ②外:褐色 ③白色粒 ④胸部破片 | 外面部:ナデミニギキ→弧状沈線文2条。 | 内面部:ナデミニギキ。 | 覆土一括 |
| 15 | 弥生土器 壺 | 口径:- 底径:- 器高:- | ①良好 ②外:にぶい褐、内:にぶい黄褐 ③チャート、黑色粒、褐色砂 ④胸部破片 | 外面部:斜方方向のハケメ→横位沈線文4条と沈線による連弧文がある。 | 内面部:急曲面壁により調整不明。 | 覆土一括 |
| 16 | 弥生土器 壺 | 口径:- 底径:- 器高:- | ①良好 ②外:にぶい褐、内:褐色砂 ③石英、角閃石、白色粒 ④胸部破片 | 外面部:ハケメ上位は単節L.R.縦文を横位施文後に、横位沈線文と波状沈線文。下位はミガキ。 | 内面部:横方方向のナデ。 | 覆土一括 |
| 17 | 弥生土器 壺 | 口径:- 底径:- 器高:- | ①良好 ②外:にぶい褐、内:にぶい黄褐 ③チャート、黑色粒、褐色砂 ④胸部破片 | 外面部:斜方方向のハケメ→ミガキ。2条の横位沈線文の間を竹状工具による連續刺突文。下は単節L.R.縦文を横位施文→波状沈線文か。 | 内面部:横方方向のハケメ・ナデ。 | 覆土一括 |

5号竪穴建物跡(第16~19図、第6表/P.L. 3・4・11)

位置:X=40811~40804、Y=-82189~-82185。重複関係:1号竪穴建物跡、7・8号溝跡、2・3・20号ピットと重複し、本遺構が古い。南西コーナー部は調査区外となる。平面形態:南北方向に長い隅丸長方形を呈する。規模:長軸7.02m、短軸4.10m、確認面からの深さ38cm。主軸方位:N-4°-E。埋没状況:覆土は黒褐色土を主体とし、下層には炭化物粒が多量に含まれる。自然埋没と想定される。床面の



第16図 5号竖穴建物跡 (1)



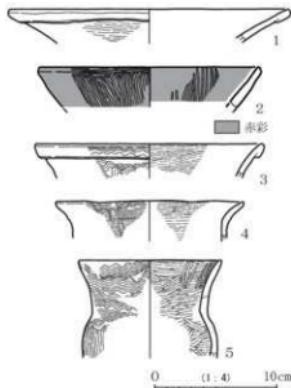
S I-5 F-F' 土質説明

1. 黒褐色土 10YR1/1: しまりやや弱い、粘性ややあり。炭化物粒 6~5mm を多量。燒土粒・ローム粒を中量。白色粒子 Ø 1~2mm を少量含む。
2. 黒色土 10W2/1: しまり・粘性ややあり。ローム粒・白色粒子 Ø 1~2mm を少量含む。
3. 黑褐色土 10W1/7/1: しまりやや弱い、粘性ややあり。ローム粒を少量含む。
4. 黑褐色土 10W3/1: しまり・粘性ややあり。ローム粒を中量。白色粒子 Ø 1~2mm を少量含む。
5. 黑褐色土 10W3/2: しまりやや弱い、粘性ややあり。炭化物粒を中量。白色粒子 Ø 1~2mm を少量含む。
6. 黑褐色土 10W2/1: しまり・粘性ややあり。炭化物粒 Ø 1~5mm を中量。ローム粒を中量。白色粒子 Ø 1~2mm を少量含む。
7. 黑褐色土 10W2/1: しまり・粘性ややあり。ローム粒を少量含む。
8. 灰黃褐色土 10W2/2: しまり強い、粘性ややあり。ローム粒・ロームブロック Ø 1~10cm を多量含む。掘り方。
9. 黑褐色土 10W2/1: しまりやや弱い、粘性ややあり。ローム粒を少量含む。貯藏穴。
10. 黑褐色土 10W1/7/1: しまりやや弱い、粘性ややあり。ローム粒を少量含む。貯藏穴。
11. 黑褐色土 10W3/2: しまり・粘性ややあり。ローム粒を多量。白色粒子 Ø 1~2mm を少量含む。P1。
12. 黑褐色土 10W3/1: しまり・粘性ややあり。ローム粒・白色粒子 Ø 1~2mm を少量含む。P1。

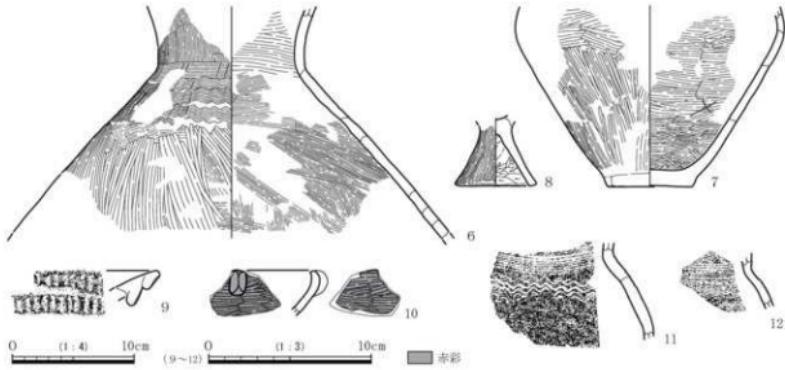
- ①. 黒褐色土 10YR1/2: しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を多量。燒土粒を少量含む。SD-8。
- ②. 黑褐色土 10W2/2: しまり・粘性ややあり。ロームブロック Ø 5~8cm を多量。An-C・灰白色砂質土を少量含む。SD-8。

第 17 図 5 号竪穴建物跡 (2)

状態：平坦である。床面は全面的に非常に良く硬化している。炉：竪穴の北壁寄りに位置する。南北方向に長い楕円形を呈し、長径 120cm、短径 70cm、深さ 14cm を測る。炉の中央は非常に良く焼けて焼土化しており、使用面はこの上面と考えられる。床面から使用面までの深さは約 5cm である。炉の長軸ラインの中央や南側には枕石が設置されている。枕石は長さ 36.9cm、幅 15.6cm、厚さ 12.1cm の安山岩である。石の長軸を炉の長軸と直交させ、上面がほぼ水平になるように設置されている。石は使用面より 6cm ほど上に出ており、その部分は被熱により赤く変色している。被熱の度合いは、上面と側面北側が強く赤色化している。側面南側も赤色化しているが、北側に比べると色調変化が弱い。短辺である東西の側面はあまり変色していない。柱穴：6 本検出された。このうち P1 ~ 4 が主柱穴で、4 本主柱構造である。P1 は楕円形で規模 44cm × 32cm、深さ 82cm。P2 は楕円形で規模 28cm × 22cm、深さ 94cm。P3 は楕円形で規模 55cm × 28cm、深さ 97cm。P4 は円形で規模 29cm × 28cm、深さ 89cm。P5 は西壁下、P3・4 と同ライン上に位置する。円形で規模 24cm × 24cm、深さ 5cm である。ピットと連結して深さ 4~5cm の溝が検出され、間仕切りと考えられる。P6 は円形で規模 23cm × 19cm、深さ 11cm である。貯藏穴：南壁際の中央より東寄りに位置する。平面形は円形で、断面形態は深い筒形を呈する。規模 56cm × 52cm、深さ 57cm を測る。壁周溝：認められない。掘り方：貼床が認められる。貼床はローム粒・ロームブロックを多量に含む灰黄褐色土を主体とし、厚さは 3~9cm である。掘り方の底面はやや凸凹がみられる。遺物出土状況：覆土中から弥生土器の壺・甌・高环・鉢・台付鉢の破片が多量に出土している。床面付近での出土量は少なく、1・6・7 の壺の破片がみられる程度である。また、貯藏穴の下層からは 2 の赤彩鉢などの破片が数点出土している。時期：弥生時代後期後半。



第 18 図 5 号竪穴建物跡出土遺物 (1)



第19図 5号堅穴建物跡出土遺物（2）

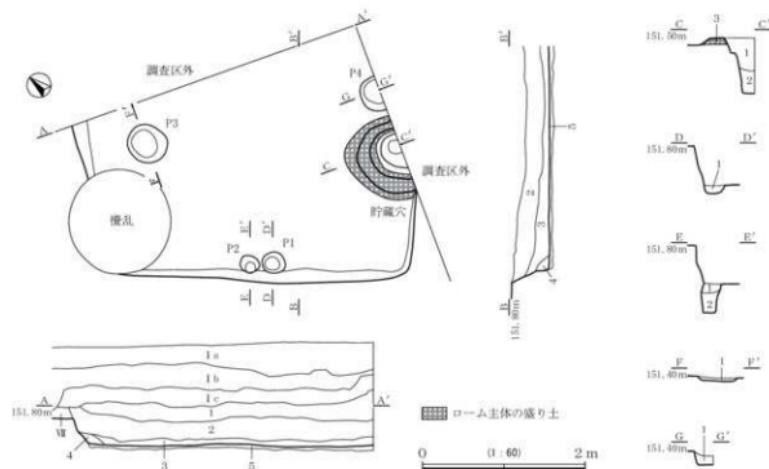
第6表 5号堅穴建物跡出土遺物観察表

()は推定値。[]は残存値を表す

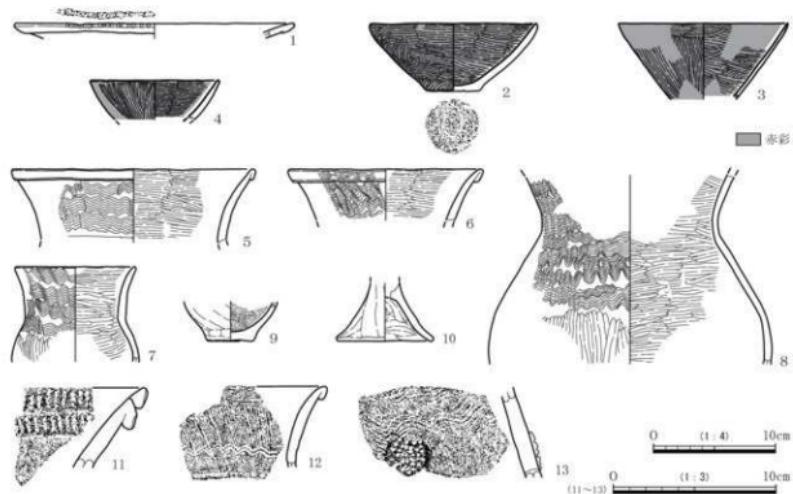
| 番号 | 器種 | 法量(cm) | ①焼成 ②色調 ③船上 ④残存 | 成・整形技法の特徴 | 出土位置／備考 |
|----|-------------|-----------------------------------|---|---|-------------------------------|
| 1 | 弥生土器 壺 | 口径: (23.1) 底径: — 器高: [2.8] | ①普通 ②内外: 棕 ③海面滑削、 チャート、白色粒。黒色粒 ④口縁部 1/8 | 外面: 折り返し口縁。折り返し部横ナデ。口縁部横方 向のミガキ。 内面: 摩耗のため調整文不明。 | 北東部下層 |
| 2 | 弥生土器 鉢 | 口径: (18.2) 底径: — 器高: [3.3] | ①良好 ②内外: 明赤褐 ③チャート、 白色粒。黒色粒。褐色粒 ④口縁部 1/8 | 外面: 口縁部横方向のミガキ—縦方向のミガキ。赤彩。 内面: 口縁部横方向のハケメー横方向のミガキ。赤彩。 | 貯藏穴下層／内 面のミガキは大 部分が剥落。 |
| 3 | 弥生土器 甕 | 口径: (18.9) 底径: — 器高: [2.8] | ①良好 ②外: 褐、内: にぶい黄褐 ③チャート、白色粒。黒色粒 ④口縁部 1/10 | 外面: 折り返し口縁。口縁部横ナデ→3条1単位の櫛 摺波状文。 内面: 口縁部横方向のハケメー。 | 南東部覆土中／ 外面スッ付着。 |
| 4 | 弥生土器 甕 | 口径: (15.5) 底径: — 器高: [3.3] | ①良好 ②外: にぶい黄褐、内: に ぶい黄褐 ③チャート、白色粒 ④口縁部 1/8 | 外面: 口縁部 2 条1単位の櫛摺波状文。頭部同部位の 2連止め櫛摺波状文。 内面: 口縁部横方向のミガキ。 | 南西部覆土中／ 外面スッ付着。 |
| 5 | 弥生土器 小形甕 | 口径: (11.7) 底径: — 器高: [8.1] | ①良好 ②内外: にぶい黄褐 ③石英、 チャート、白色粒 ④口縁部 一側部上位 1/5 | 外面: 口縁部一側部7条1単位の櫛摺波状文を下から 上へ4段施す。頭部上位ハケメー縦方向のミガキ。 内面: 頭部横・縦方向のミガキ。頭部一側部上位横・ 斜方向のミガキ。 | 北東部覆土中／ 外面スス、内面 コゲ付着。 |
| 6 | 弥生土器 壺 | 口径: — 底径: [18.9] 器高: [14.7] | ①普通 ②外: 棕、内: 灰黄褐 ③角閃石、チャート、白色粒 ④頭部一側部上半 1/3 | 外面: 頭部一側部内のハケメー8条1単位の2連止め櫛 摺波状文。頭部7~8条1単位の櫛摺波状文を4段、横・ 斜方向のハケメー縦方向のミガキ。 内面: 頭部横方向のミガキ。頭部横・斜方向のハケメー。 | 南西部下層／内 面削部は小円形 の剥離斑多い。 |
| 7 | 弥生土器 壺 | 口径: (7.0) 底径: [14.7] | ①良好 ②外: にぶい赤褐、内: 棕 ③チャート、白色粒。黒色粒 ④脚部 1/3、底部 4/5 | 外面: 頭部横方向のミガキ。頭部下位竪方向のミ ガキ。脚部下端横方向のナデ。底部ナデ。 内面: 脚部内～下位脚・斜方向のミガキ、「×」の線刻か 底部一方方向のミガキ。 | 北東部下層／外 面にスス、内面 にコゲ付着。 |
| 8 | 弥生土器 台付鉢 | 口径: — 底径: (6.6) 器高: [5.6] | ①良好 ②外: にぶい褐、内: に ぶい黄褐 ③石英、角閃石、白色粒 ④口縁部 1/4 | 外面: 台部ハケメー縦方向のミガキ。 内面: 台部横方向のナデ→下半横方向のケズリ。 | 南西部覆土中 |
| 9 | 弥生土器 壺 | 口径: — 底径: — 器高: — | ①普通 ②内外: 棕 ③石英、角閃 石、チャート。白色粒 ④口縁部 破片 | 外面: 折り返し口縁 2段。7条1単位の櫛齒状工具によ る連續刺突文。 | 貯藏穴下層 |
| 10 | 弥生土器 鉢 | 口径: — 底径: — 器高: — | ①良好 ②内外: 明赤褐 ③チャート、 黒色粒 ④口縁部破片 | 外面: 横方向のミガキ。棒状貼付文。赤彩。 内面: 横方向のミガキ。赤彩。 | 北東部覆土中 |
| 11 | 弥生土器 壺・甕 | 口径: — 底径: — 器高: — | ①良好 ②外: 棕、内: 灰黄褐 ③チャート、白色粒。褐色粒 ④脚部破片 | 外面: 頭部 5条1単位の2連止め櫛摺波状文→口縁部櫛 摺波状文。脚部 8条1単位の櫛摺波状文→横方向のミ ガキ。 内面: ハケメー横方向のミガキ一部的に縦方向のミ ガキ。 | 南西部覆土中 |
| 12 | 弥生土器 壺・甕 | 口径: — 底径: — 器高: — | ①良好 ②外: 棕、内: 灰黄褐 ③チャート、白色粒。黒色粒 ④脚部破片 | 外面: 脚部 8条1単位の2連止め櫛摺波状文→口縁部櫛 摺波状文。脚部 8条1単位の櫛摺波状文を 2段以上。 内面: 横方向のミガキ。 | 貯藏穴下層 |

6号竪穴建物跡（第20・21図、第7・8表／P.L. 4・11）

位置：X=40811～40807、Y=-82174～-82171。重複関係：南西角を現代の擾乱に壊される。北東側は調査区外となる。平面形態：北東一南西方向に長い隅丸長方形を呈すと推測される。規模：調査区内では長軸3.16m、短軸4.02m、確認面からの深さ43cm。主軸方位：N=50°～E。埋没状況：覆土は黒色土を主体とし、下層には炭化物粒が少量含まれる。自然埋没と想定される。床面の状態：平坦である。床面は全面的に非常に良好化している。炉：調査区内では認められない。柱穴：調査区内で4本検出された。P1は円形で規模27cm×26cm、深さ10cm。P2はほぼ円形で規模24cm×21cm、深さ36cm。P3はほぼ円形で規模50cm×45cm、深さ4cm。P4は円形と推測され、規模44cm×23cm以上、深さ16cm。P1・2は出入り口ピットの可能性がある。貯藏穴：南東壁際の南寄りに位置する。平面形は円形を呈すと推測され、断面形態は深い筒形を呈する。規模45cm×25cm以上、深さ68cmを測る。周囲にローム土を主体とした盛り土が土手状にめぐる。盛り土は上幅8～19cm、下幅20～40cm、高さ6～10cmを測る。壁周溝：認められ



れない。掘り方：貼床が認められる。貼床はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土で、厚さは3~7cmである。掘り方の底面はやや凸凹がみられる。遺物出土状況：覆土中から弥生土器の壺・甕・鉢・台付鉢の破片が多量に出土している。床面直上の遺物はみられない。時期：弥生時代後期後半。



第21図 6号竪穴建物跡出土遺物

第7表 6号竪穴建物跡出土遺物観察表（1）

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | ①焼成②色調③胎土④残存 ⑤普通 ⑥内外: 染 ⑦チャート、 白色粒、黒色粒、褐色粒 ⑧口縁部 部高: [1.2] ⑨底高: 1/8 | 成・整形技法の特徴 | | 出土位置/備考 |
|----|-------------|-----------------------------------|---|--|---------------------------------|---------|
| | | | | 外面: 折り返し口縁。口部にキザミ。口縁部横ナデ。 | 内部: 滑面摩耗により調整不明。 | |
| 1 | 弥生土器 壺 | 口径: [(2.3)] 底径: — 器高: [1.2] | ①良好 ②内外: 赤褐色 ③チャート、 白色粒、黒色粒、褐色粒 ④口縁部 部高: 1/8 | 外面: 口縁部横方向のミガキ。体部横・斜方向のミガキ。 内部: 滑面摩耗により調整不明。 | 北西部上層 | |
| 2 | 弥生土器 鉢 | 口径: [(1.3)] 底径: 4.4 器高: 5.6 | ①良好 ②内外: 赤褐色 ③チャート、 白色粒、黒色粒 ④口縁部 部高: 1/3、底部完形 | 外面: 口縁部横方向のミガキ。体部横・斜方向のミガキ。 内部: 口縁部～体部横・斜方向のミガキ。底部ミガキ。 口縁部～底部に赤彩。 | 北東部上層/南 東部覆土中 | |
| 3 | 弥生土器 鉢 | 口径: [(1.3)] 底径: — 器高: [6.2] | ①良好 ②内外: 赤褐色 ③白色粒、 黒色粒 ④口縁部～体部 1/5 | 外面: 口縁部横方向のミガキ。体部縱方向のミガキ。赤 彩。 | 北西部上層 | |
| 4 | 弥生土器 鉢 | 口径: [(1.0)] 底径: — 器高: [3.2] | ①良好 ②内外: 赤褐色 ③チャート、 白色粒、黒色粒、赤色粒 ④口縁部～体部 1/6 | 外面: 口縁部～体部横・斜方向のミガキ。赤彩。 内部: 口縁部～体部縱方向のミガキ。赤彩。 | 北東部覆土中 | |
| 5 | 弥生土器 甕 | 口径: [(2.0)] 底径: — 器高: [6.0] | ①良好 ②内外: にぶい褐色 ③チャート、白色粒、黑色粒 ④口縁部 1/8 | 外面: 折り返し口縁。口縁部横ナデ→5~7条1単位の 櫛描波状文を2段。腹部2進止め櫛描波状文。 内部: 口縁部横方向のミガキ。 | 北西部覆土中 | |
| 6 | 弥生土器 甕 | 口径: [(1.6)] 底径: — 器高: [4.2] | ①良好 ②内外: にぶい褐色 ③チャート、白色粒 ④口縁部 1/8 | 外面: 折り返し口縁。折り返し口縁ナデ→5条1単位の 櫛描波状文。口縁部横ナデ→同単位の櫛描波状文を4 段以上。 内部: 口縁部横方向のミガキ。 | 南西部上層/外 面にスス付着。 | |
| 7 | 弥生土器 小形甕 | 口径: [(9.9)] 底径: — 器高: [7.8] | ①良好 ②内外: にぶい褐色 ③チャート、白色粒 ④口縁部 制御部上位 1/5 | 外面: 口縁部横方向のハケメ→7~8条1単位の櫛描波 状文を4段。胸部上位横方向のハケメ→縱方向のミガ キ。 内部: 口縁部～制御部上位横方向のミガキ。 | 下層/外面にス ス付着。 | |
| 8 | 弥生土器 甕・壺 | 口径: — 底径: — 器高: [15.5] | ①良好 ②外: 明黄褐色、内: にぶい 褐色 ③角閃石、チャート、白色粒 ④腹部～胸部上半 1/3 | 外面: 腹部～胸部上位横・斜方向のハケメ→6~8条1 単位の櫛描波状文を上から下へ9段以上施文。腹部中 心ハケメ→縱方向のミガキ。 内部: 腹部～胸部上半横方向のミガキ。 | 北西部上層/ S I~6内腹屈/二 次被熱痕あり。 | |

第8表 6号竪穴建物跡出土遺物観察表(2)

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | ①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 | 成・整形技法の特徴 | | ()は推定値。[]は残存値を表す 出土位置/備考 |
|----|-------------|-------------------------------|---|--|---|-------------------------------|
| | | | | 外部: 脚部下位斜→横方向のナデ。ミガキは剥落か。底部ナデ。 | 内部: 脚部下位→底部横・斜方向のミガキ。 | |
| 9 | 弥生土器 壺・甕 | 口径: - 底径: 3.9 器高: [3.2] | ①良好 ②内外にぶい褐色、内: 灰黃褐色 ③石英、チャート、白色粒 ④脚部下位 1/2、底部完形 | 外面: 脚部下位斜→横方向のナデ。ミガキは剥落か。底部ナデ。 | 内部: 脚部下位→底部横・斜方向のミガキ。 | 北西部覆土中 |
| 10 | 弥生土器 台付鉢 | 口径: - 底径: 8.0 器高: [4.7] | ①良好 ②内外: 明赤褐色 ③石英、チャート、白色粒 ④台部 1/2 | 外面: 台部廠方向のナデ。 内部: 台部廠方向のナデ→上半は縱方向のナデ。 | 内部: 台部廠方向のナデ→上半は縱方向のナデ。 | 北東部覆土中 |
| 11 | 弥生土器 壺 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①普通 ②内外: 棱 ③角閃石、チャート、白色粒 ④口縁部破片 | 外面: 折り返し口縁 2段。折り返し部に 7条 1単位の櫛状工具による連続突文。 内部: ミガキ。 | 外面: 折り返し口縁 2段。折り返し部ハケメ→4条 1単位の櫛状工具による連続突文。 内部: ミガキ。 | 北東部覆土中／ 外外面ともに摩耗。 |
| 12 | 弥生土器 壺 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①良好 ②内外: 明赤褐色 ③石英、角閃石、チャート、白色粒 ④口縁部破片 | 外面: 折り返し口縁。折り返し部ハケメ→2条および 5条 1単位の櫛状工具を 2段。頸部 2連止めの櫛状突文。 内部: 口縁部ハケメ→横方向のミガキ。 | 外面: 折り返し口縁。折り返し部ハケメ→4条 1単位の櫛状工具による連続突文。 内部: ミガキ。 | 北東部覆土中 |
| 13 | 弥生土器 壺 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①普通 ②内外: 棱 ③石英、チャート、小礫 ④脚部破片 | 外面: ハケメ→7条 1単位の櫛状突文を 2段以上。波状文の下はミガキ。円形浮文を附す。円形浮文に刺傷が施される。 内部: 横方向のミガキ。 | 外面: ハケメ→7条 1単位の櫛状突文を 2段以上。波状文の下はミガキ。円形浮文を附す。円形浮文に刺傷が施される。 内部: 横方向のミガキ。 | 北東部覆土中／ 外外面ともに摩耗。 |

2 溝跡

1号溝跡(第22図／P.L. 4)

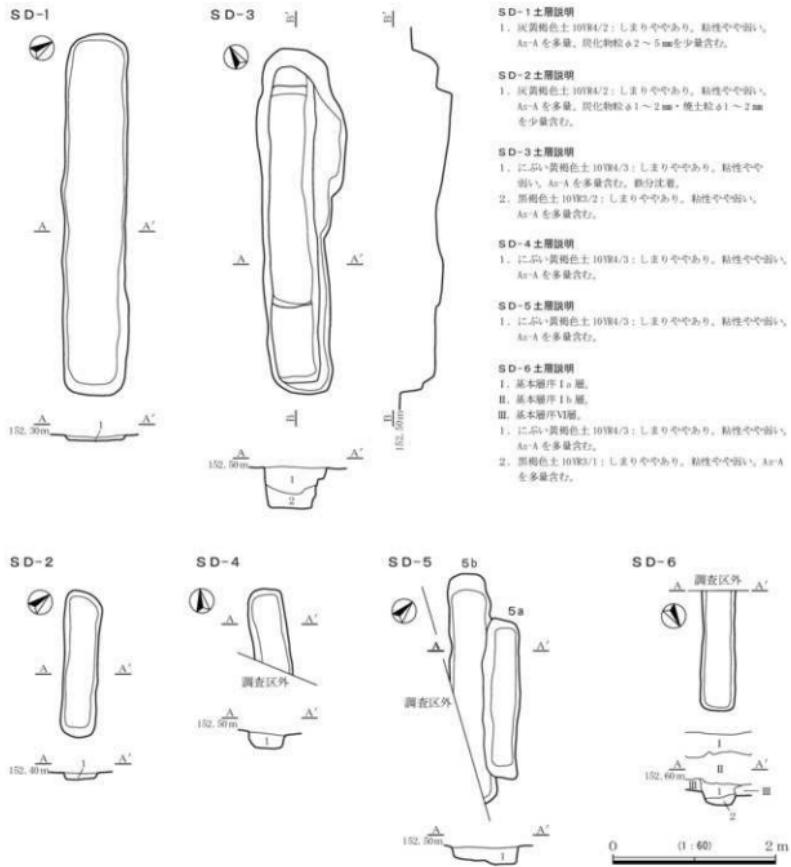
位置: X=40816～40813、Y=-82183～-82179。重複関係: なし。走行方位: 北西～南東方向へ直線的に走行する。N-57°-Wを指す。規模: 長さ 4.43m、上端幅 75～82cm、下端幅 62～67cm、確認面からの深さ 7～9cm。底面の状態: 概ね平坦である。断面形態: 浅い箱形を呈する。埋没状況: 覆土は As-A を多量に含む灰黄褐色土で、人為埋没と想定される。遺物出土状況: 覆土中から縄文土器、土師器壊、近世陶磁器碗の破片が数点出土している。縄文土器・土師器は粉れ込みで遺構には伴わない。時期: 覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。備考: As-A の復旧溝と想定される。

2号溝跡(第22図／P.L. 5)

位置: X=40822～40820、Y=-82197～-82195。重複関係: なし。走行方位: 北西～南東方向へ直線的に走行する。N-48°-Wを指す。規模: 長さ 1.81m、上端幅 41～46cm、下端幅 30～35cm、確認面からの深さ 7～9cm。底面の状態: 概ね平坦である。断面形態: 浅い箱形を呈する。埋没状況: 覆土は As-A を多量に含む灰黄褐色土で、人為埋没と想定される。遺物出土状況: 覆土中から弥生土器の破片が数点出土しているが、粉れ込みで遺構には伴わない。時期: 覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。備考: As-A の復旧溝と想定される。

3号溝跡(第22図／P.L. 5)

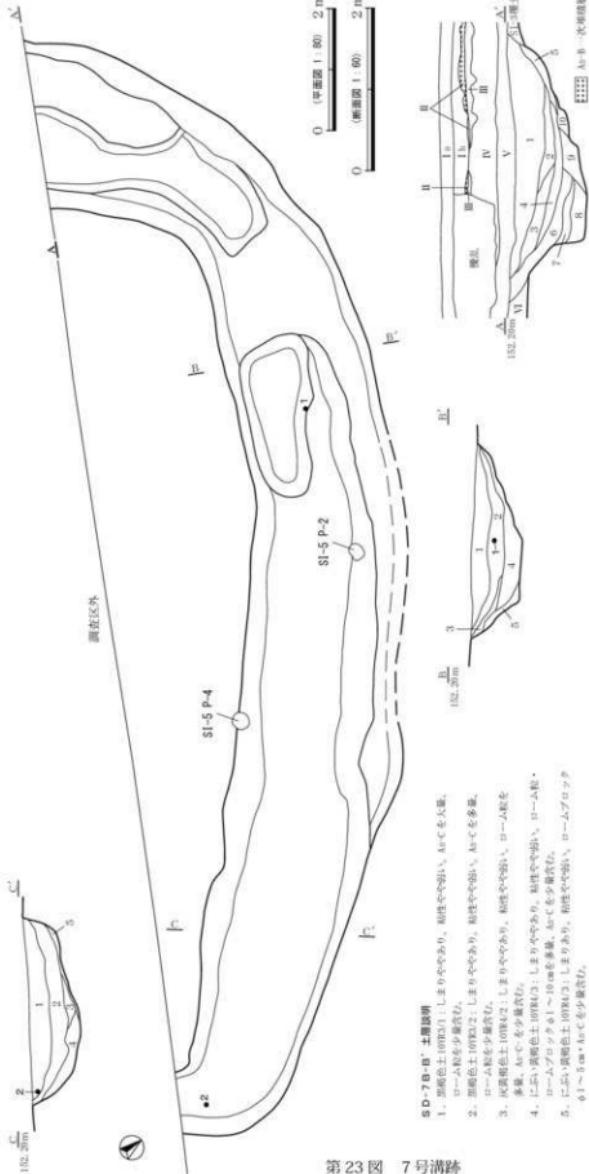
位置: X=40816～40813、Y=-82220～-82198。重複関係: なし。走行方位: 北東～南西方向へ直線的に走行する。N-30°-Eを指す。規模: 長さ 4.26m、上端幅 75～111cm、下端幅 40～52cm、確認面からの深さ 36～50cm。底面の状態: 緩やかな起伏をもつ。断面形態: 段を有し、深い箱形を呈する。埋没状況: 覆土は As-A を多量に含み、上層はにぶい黄褐色土、下層は黒褐色土を主体とする。上層には鉄分が沈着する。人為埋没と想定される。遺物出土状況: 覆土中から弥生土器の破片が数点出土しているが、粉れ込みで遺構には伴わない。時期: 覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。備考: As-A の復旧溝と想定される。



第22図 1~6号溝跡

4号溝跡(第22図/P.L. 5)

位置:X=40801 ~ 40800、Y= -82182。重複関係：8号溝跡と重複し、本遺構が新しい。南側は調査区外となる。走行方位：北南方向へ直線的に走行する。N=2°-Eを指す。規模：調査区内での長さ 0.99 m、上端幅 43 ~ 46cm、下端幅 30 ~ 32cm、確認面からの深さ 18 ~ 22cm。底面の状態：概ね平坦である。断面形態：箱形を呈する。埋没状況：覆土は As-A を多量に含むふい黄褐色土で、人為埋没と想定される。遺物出土状況：出土していない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。備考：As-A の復旧溝と想定される。



5号溝跡（第22図／P L. 5）

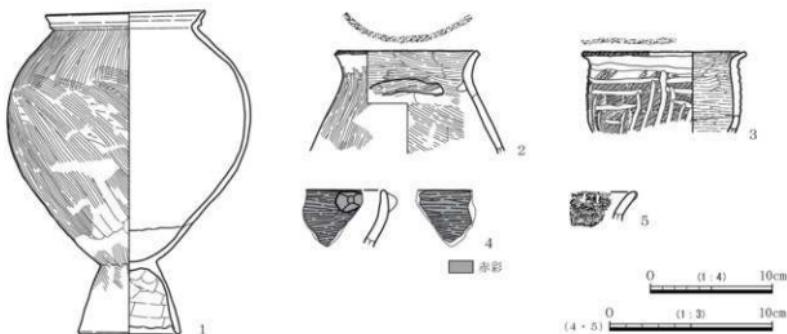
位置:X=40803～40801、Y=-82186～-82183。重複関係：7号溝跡と重複し、本遺構が新しい。北側を5a、南側を5bとする。5bの南側は調査区外となる。走行方位：北西—南東方向へ直線的に走行する。5aはN-42°-W、5bはN-43°-Wを指す。規模：5aは長さ1.98m、上端幅40～46cm、下端幅24～31cm、確認面からの深さ21～25cm。5bは長さ2.82m、上端幅50～52cm、下端幅40～42cm、確認面からの深さ15～19cm。底面の状態：概ね平坦である。断面形態：箱形を呈する。埋没状況：覆土はAs-Aを多量に含むにぶい黄褐色土で、人為埋没と想定される。遺物出土状況：出土していない。時期：覆土にAs-Aが混入することから、近世の帰属と想定される。備考：As-Aの復旧溝と想定される。

6号溝跡（第22図／P L. 5）

位置:X=40816～40814、Y=-82206～-82205。重複関係：なし。南側は調査区外となる。走行方位：北東—南西方向へ直線的に走行する。N-33°-Eを指す。規模：調査区内での長さ1.48m、上端幅38～43cm、下端幅30～33cm、確認面からの深さ12～17cm。底面の状態：概ね平坦である。断面形態：箱形を呈する。埋没状況：覆土はAs-Aを多量に含み、上層にはぶい黄褐色土、下層は黒褐色土を主体とする。人為埋没と想定される。遺物出土状況：覆土中から土師器甕、近世陶器碗の破片が数点出土している。土師器は紛れ込みで遺構には伴わない。時期：覆土にAs-Aが混入することから、近世の帰属と想定される。備考：As-Aの復旧溝と想定される。

7号溝跡（第23・24図、第9表／P L. 5・6・12）

位置:X=40811～40801、Y=-82198～-82182。重複関係：1・3・5号竪穴建物跡、5号溝跡、6号土坑、2・15・16号ピットと重複する。新旧関係は、3・5号竪穴建物跡より新しく、1号竪穴建物跡、5号溝跡、6号土坑、2・15・16号ピットより古い。南側は調査区外となる。走行方位：北西—南東方向へやや弧を描いて走行し、両端は南北方向へ屈曲する。北西—南東方向はN-50°-Wを指す。規模：北西—南東方向の長さ18.1m、上端幅1.83～2.76m、下端幅1.22～2.10m、確認面からの深さ45～68cm。底面の状態：段差を有し一定の深さではない。北西部（Bセクションの西側）は他に比べて掘り込みが浅い。断

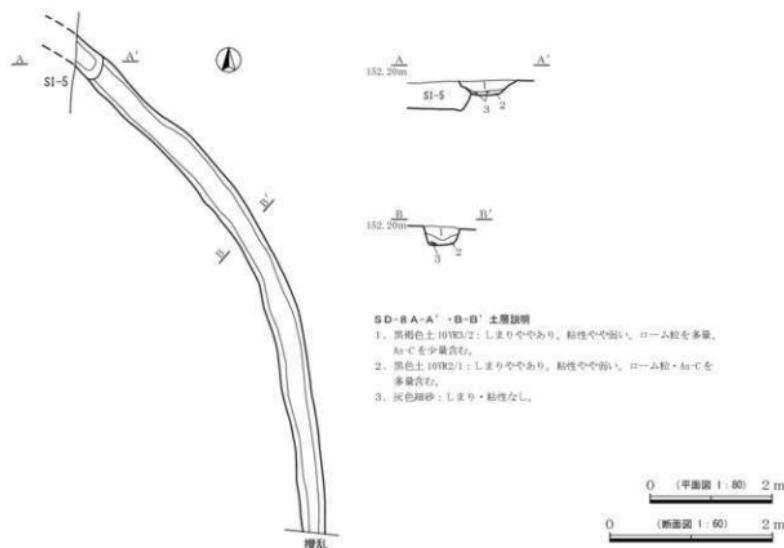


第24図 7号溝跡出土遺物

第9表 7号溝跡出土遺物観察表

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | ①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 | 成・整形技法の特徴 | | 出土位置/備考 |
|----|---------------------|-----------------------------------|--|---|--------------------------|---------|
| | | | | () は推定値。[]は残存値を表す | | |
| 1 | 上師器 S字状口縁 台付甕 | 口径: 13.1 底径: (8.3) 器高: 26.6 | ①良好 ②内外にぶい橙 石英、チャート、白色粒、黒色 ④口縁部完形、胴部ほぼ完形、 台部 3/4 | 外面: 口縁部横ナデ。胸部横・斜方向のケズリ→中へ下 位傾方向のハケメ→上位傾方向のハケメ。台部横ナデ →上位に斜方向のハケメ。 内面: 口縁部横ナデ。胴部横方向のヘラナデ。台部横・ 斜方向のヘラナデ。 | 中層/煮炊きをした使用痕跡なし。 | |
| 2 | 弥生土器 甕 | 口径: (11.8) 底径: - 器高: [8.4] | ①良好 ②外: 明赤褐色、内: にぶい 赤褐色 ③石英、白色粒、小礫 ④口縁部 1/3、胴部上位 1/5 | 外面: 口唇部に単節 L.R 織文。口縁部横ナデ。胴部上 位傾方向のミガキ。 内面: 口縁部横方向のミガキ。胴部上位斜方向のハケメ。 頭部に横長の突起を貼付。突起の上面はミガキ。下面 はナデ。 | 上層/焼成は非常に良好で、ミ ガキも丁寧。 | |
| 3 | 弥生土器 甕 | 口径: (13.5) 底径: - 器高: [6.6] | ①良好 ②外: にぶい褐色、内: にぶ い橙 ③海綿滑針、白色粒、黒色 粒 ④口縁部~胴部上半 1/4 | 外面: 口唇部に単節 L.R 織文。口縁部横ナデ。胴部上 半ハケメ→單節 L.R 織文を横位施文→沈線によるコの字 重ね文。 内面: 口縁部~胴部上半横方向のミガキ。 | 下層 | |
| 4 | 弥生土器 甕 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①良好 ②外: 明赤褐色、内: 赤褐色 ③白色粒、黒色粒 ④口縁部破片 | 外面: 口縁部横方向のミガキ。円形貼付文。赤彩。 内面: 口縁部横方向のミガキ。赤彩。 | 上層 | |
| 5 | 弥生土器 甕 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①普通 ②外: にぶい黄褐色、内: に ぶい黄褐色 ③角閃石、白色粒 ④口縁部破片 | 外面: 口唇部ホサミ。口縁部横方向のハケメ。 内面: 口縁部ハケメ→横方向のミガキ。 | 上層/内面摩耗。 | |

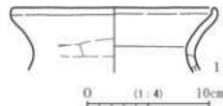
面形態: 逆台形を呈する。埋没状況: 覆土は As-C を多量に含み、上層は黒褐色土、下層は灰黄褐色土を主体とする。自然埋没と想定される。遺物出土状況: 覆土中層から、土師器 S 字状口縁台付甕(1)が溝の外側から内側へ落ち込むような状態で出土している。そのほか、弥生土器の破片が多量に出土するが、紛れ込みで造構には伴わない。時期: 遺物から古墳時代前期の帰属と想定される。備考: 平面形態から方形周溝墓の可能性が考えられる。



第25図 8号溝跡

8号溝跡（第25・26図、第10表／P.L. 6・12）

位置：X=40809～40801、Y=-82185～-82181。重複関係：5号竪穴建物跡、4号溝跡と重複する。新旧関係は5号竪穴建物跡より新しく、4号溝跡より古い。南側は攪乱に壊されるが、調査区外へ続くと推測される。走行方位：北西—南東方向へ弧を描いて走行する。概ねN-27°-Wを指す。5号竪穴建物跡の土層断面観察から、竪穴建物跡を切る形で北西方向へ続くことが確認されているが、平面で捉えることはできなかった。規模：調査区内での長さ9.20m、上端幅37～53cm、下端幅21～37cm、確認面からの深さ18～23cm。底面の状態：概ね平坦である。断面形態：逆台形を呈する。埋没状況：覆土はAs-Cを含む黒褐色土を主体とし、間に細砂が確認される。自然埋没と想定される。遺物出土状況：覆土中から土師器の内斜口縁環および甕の破片が少量出土している。時期：遺物から古墳時代の帰属と想定される。



第26図 8号溝跡出土遺物

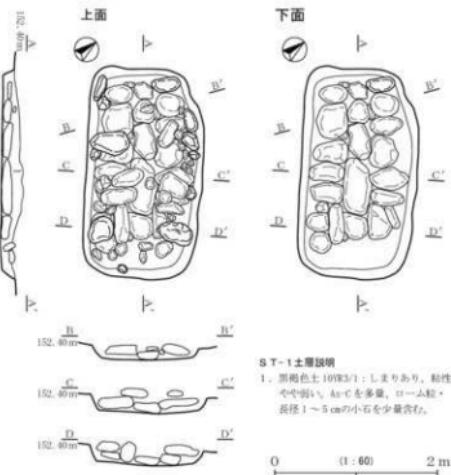
第10表 8号溝跡出土遺物観察表

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | 成・整形技法の特徴 | | | | 出土位置/備考 |
|----|----------|-------------------------------|--------------------|---------|----------|--|---------|
| | | | ①焼成 | ②色調 | ③胎土 | ④残存 | |
| 1 | 土師器 甕 | 口径：(17.0) 底径：— 器高：[5.3] | ①良好 ③石英、角閃石、白色粒 | ②内外にぶい地 | ④口縁部1/10 | 外面：口縁部横ナデ。頸部横方向のヘラナデ。 内面：口縁部横ナデ。頸部横方向のヘラナデ。 | 覆土一括 |

3 配石遺構

1号配石遺構（第27図／P.L. 7）

位置：X=40819～40817、Y=-82190～-82187。重複関係：4号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。平面形態：土坑は隅丸長方形を呈する。配石は長方形を呈し、大振りの安山岩を3列に配している。中央の列は土坑の長軸方向と石の長辺が平行する。外側の2列は概ね長辺が直交するように置かれている。上面から出土する石は原位置を保っていないものが多いと考えられる。長軸方位：N-50°-W。規模：土坑は長径2.59m、短径1.43m、確認面からの深さ20cm。配石は長径2.07m、短径1.24m、石の厚さ10～15cm。断面形態：土坑は浅い箱形を呈する。埋没状況：覆土はAs-C・小石を含む黒褐色土で、自然埋没と想定される。遺物出土状況：出土していない。時期：覆土からAs-C降下（3世紀末）以降、As-B降下（1108年）以前の帰属と想定される。

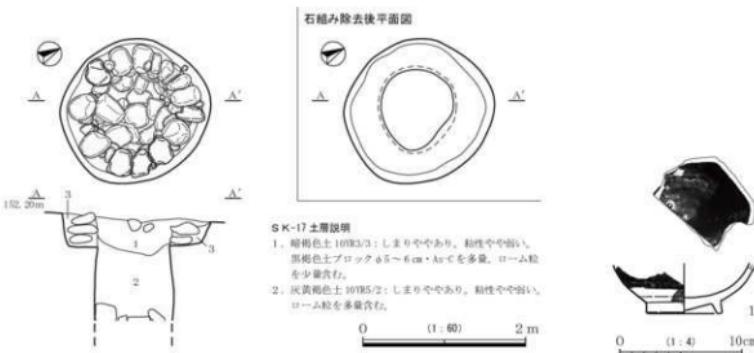


第27図 1号配石遺構

4 井戸跡

1号井戸跡（第28図、第11表／P.L. 7・12）

位置：X=40805～40803、Y=82176～82175。重複関係：なし。平面形態：ほぼ円形を呈する。上層は安山岩の石組みで、2～3段に積み上げられている。中層以下は素掘りである。長軸方位：N=0°。規模：石組み部分の掘り方は長径1.82m、短径1.72m、確認面からの深さ32～40cmを測る。井戸本体は長径0.98m、短径0.89m、確認面からの深さ1.3m以上を測る。断面形態：筒形を呈する。埋没状況：覆土はAs-Cを含み、上層は黒褐色土、下層は灰黃褐色土を主体とする。下層からは石が大量に出土しており、人為的に投棄されたものと推測される。遺物出土状況：覆土上層から近世陶器碗・捕鉢・在地系土器鍋・土師器壺・甕、須恵器碗の破片が数点出土している。Iは瀬戸・美濃系の碗である。時期：遺物および覆土にAs-Aが含まれないことから、17世紀以前、As-A降下（1783年）以前の帰属と想定される。



第28図 1号井戸跡および出土遺物

第11表 1号井戸跡出土遺物観察表

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | ①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 | 成・整形技法の特徴 | ()は推定値、 は残存値を表す | |
|----|---------|----------------------------|-----------------------------------|------------------------|--------------------|-------------|
| | | | | | 出土位置/備考 | 覆土上層/瀬戸・美濃系 |
| 1 | 陶器 甕 | 口径：— 底径：6.2 器高：[4.1] | ①— ②輪：暗褐、胎土：淡黄 ③白色粒 ④部体・高台部1/2 | 丸形、ロクロ成形。高台周辺を除き全面に鉄輪。 | | |

5 土坑

1号土坑（第29図／P.L. 7）

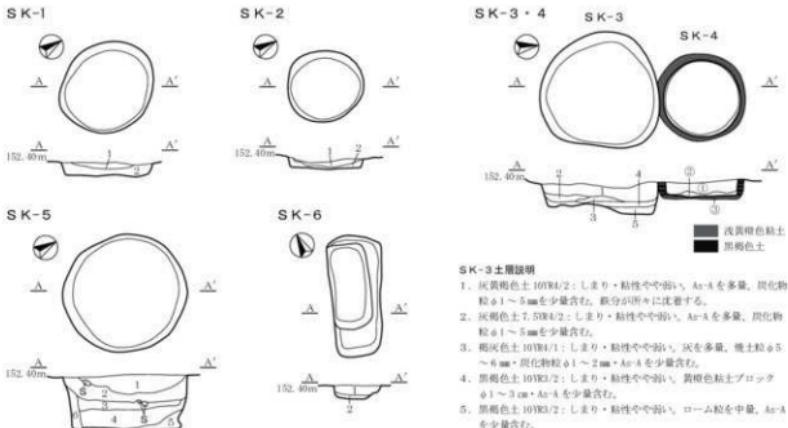
位置：X=40801～40800、Y=82180～82179。重複関係：なし。平面形態：ほぼ円形を呈する。長軸方位：N=0°。規模：長径1.24m、短径1.08m、確認面からの深さ17cm。断面形態：浅い箱形を呈する。埋没状況：覆土はAs-Aを含む黒褐色土を主体とし、下層には灰が多量に含まれる。人為埋没の可能性が想定される。遺物出土状況：覆土中から近世在地系土器鍋の破片が1点出土している。時期：覆土にAs-Aが混入することから、近世の帰属と想定される。

2号土坑 (第29図／P L. 7)

位置:X=40800～40799、Y=-82179～-82178。重複関係:なし。平面形態:ほぼ円形を呈する。長軸方位:N-22°-E。規模:長径0.94m、短径0.87m、確認面からの深さ17cm。断面形態:浅い箱形を呈する。埋没状況:覆土はAs-Aを含み、上層は褐灰色土、下層は黒褐色土を主体とする。自然埋没と想定される。遺物出土状況:出土していない。時期:覆土にAs-Aが混入することから、近世の帰属と想定される。

3号土坑 (第29図／P L. 7)

位置:X=40802～40800、Y=-82181～-82180。重複関係:4号土坑と重複し、本遺構が新しい。平面形態:ほぼ円形を呈する。長軸方位:N-8°-E。規模:長径1.47m、短径1.42m、確認面からの深さ40cm。断面形態:底面は凸凹があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋没状況:覆土はAs-Aを含み、上層は灰黄褐色土、下層は黒褐色土を主体とする。上層に炭化物粒・焼土が少量、3層に灰が多量に含まれることから、人為埋



SK-1 土層説明

- 褐灰色土 10YR4/1: しまりややあり。粘性やや弱い。As-A・ロームブロックφ1～5cmを多量、炭化物粒φ1～5mmを少量含む。
- 黒褐色土 10YR3/1: しまりやや弱い。炭を多量。As-Aを中量。ローム粒を少量含む。

SK-2 土層説明

- 褐灰色土 10YR4/1: しまりややあり。粘性やや弱い。As-Aを多量、炭化物粒φ2～5mmを少量含む。
- 黒褐色土 10YR3/1: しまりやや弱い。As-Aを中量。ローム粒を少量含む。

SK-3 土層説明

- 黒褐色土 10YR5/2: しまりややあり。粘性やや弱い。As-Aを多量、炭化物粒φ1～5mmを少量含む。
- 黒褐色土 10YR4/2: しまりややあり。粘性やや弱い。As-Aを多量、炭化物粒φ1～5mmを少量含む。
- 黒褐色土 10YR3/2: しまりややあり。粘性やや弱い。As-A・炭化物粒φ2～3mmを多量含む。
- 黒褐色土 10YR3/1: しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒φ1～3mm・ロームブロックφ1～5cmを多量、炭化物粒φ2～3mmを少量含む。

SK-4 土層説明

- 黒褐色土 10YR4/1: しまり・粘性やや弱い。As-A・ロームブロックφ1～5cmを多量、炭化物粒φ1～5mmを少量含む。
- 黒褐色土 10YR4/1: しまりややあり。粘性やや弱い。As-A・ロームブロックφ1～2cmを少量含む。
- 淡黄褐色 10YR8/4 粘土・黒褐色土 10YR3/1 の互層: しまり・粘性あり。淡黄褐色粘土はローム粒を多量含む。

SK-5 土層説明

- 黒褐色土 10YR5/2: しまりややあり。粘性やや弱い。As-Aを多量、炭化物粒φ1～5mmを少量含む。
- 黒褐色土 10YR4/2: しまりややあり。粘性やや弱い。As-Aを多量、炭化物粒φ1～5mmを少量含む。
- 黒褐色土 10YR3/2: しまりややあり。粘性やや弱い。As-A・炭化物粒φ2～3mmを多量含む。
- 黒褐色土 10YR3/1: しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒φ1～3mm・ロームブロックφ1～5cmを多量、炭化物粒φ2～3mmを少量含む。

SK-6 土層説明

- 灰黃褐色土 10YR5/2: しまりややあり。粘性やや弱い。As-Aを多量含む。
- 灰黃褐色土 10YR4/2: しまりややあり。粘性やや弱い。As-Aを多量含む。

0 (1:60) 2 m

第29図 1～6号土坑

没の可能性が想定される。遺物出土状況：覆土中から近世陶磁器碗、在地系土器鍋の破片が数点出土している。時期：遺物および覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

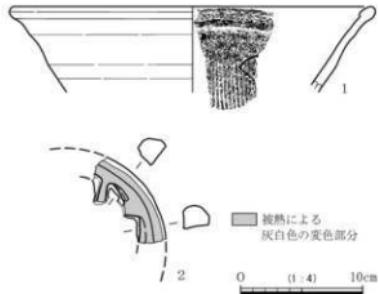
4号土坑（第 29 図／P L. 7）

位置:X=40803 ~ 40802、Y=-82181 ~ -82180。重複関係：3号土坑と重複し、本遺構が古い。平面形態：円形を呈する。長軸方位：N - 8° - E。規模：長径 0.95 m、短径 0.94 m、確認面からの深さ 24cm。掘り方は長径 11 cm、短径 106 cm、確認面からの深さ 28 cm。断面形態：浅い箱形を呈する。構築状態：掘り方の内側に粘土と黒褐色土を貼り付けて成形している。底面は浅黄橙色粘土（厚さ 2 ~ 4 cm）、壁面は浅黄橙色粘土（厚さ 3 cm）と黒褐色土（厚さ 1 ~ 2 cm）の互層である。埋没状況：覆土は As-A・炭化物粒を含む褐灰色土を主体とし、自然埋没と想定される。遺物出土状況：覆土中から近世陶磁器碗、在地系土器鍋の破片が数点出土している。時期：遺物および覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

5号土坑（第 29・30 図、第 12 表／P L. 8・12）

位置：X=40807 ~ 40805、Y=-82182 ~ -82181。

重複関係：なし。平面形態：ほぼ円形を呈する。長軸方位：N - 29° - E。規模：長径 1.54 m、短径 1.45 m、確認面からの深さ 68 cm。断面形態：箱形を呈する。埋没状況：上層は As-A・炭化物粒を含む灰黄褐色土を主体とする。下層はロームブロック・炭化物粒を含む黒褐色土を主体とし、4 層には少量の焼土が含まれる。下層は人為埋没の可能性が想定される。遺物出土状況：覆土中から近世陶器擂鉢、在地系土器鍋、土師質土器などの破片が数点出土している。1 の擂鉢は瀬戸・美濃系で、口縁部が玉縁状を呈する。時期：遺物から 18 世紀代の帰属と想定される。



第 30 図 5号土坑出土遺物

第 12 表 5号土坑出土遺物観察表

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | ①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 | | | | | 成・整形技法の特徴 | 出土位置/備考 |
|----|-------------|---|-----------------|-----------|-------|----------------------------------|------------|------------|---------|
| | | | ①—②輪：暗褐色、胎土：浅黄橙 | ③チャート、黒色釉 | ④口縁部～ | ロクロ成形。口縁部は玉縁形。輪目 11 本以上。内外全面に鉄釉。 | | | |
| 1 | 陶器 擂鉢 | 口径：(30.0) 底径：(27.0) 高さ：[7.0] 器高：[7.0] | ①法量(cm_g) | ②焼成 | ③色調 | ④胎土 | ⑤残存 | ⑥成・整形技法の特徴 | 出土位置/備考 |
| 2 | 土師質土器 さな | ①上面径(11.0)、下面径(12.3)、器高：13.3、重さ：20.4 ②普通 ③にふい槽 ④白色釉、黒色釉、褐 色釉 ⑤破片 ⑥ナデ調整。上面は被熱により還元し灰白色化する。 | ②燒成 | ③色調 | ④胎土 | ⑤残存 | ⑥成・整形技法の特徴 | 出土位置/備考 | |

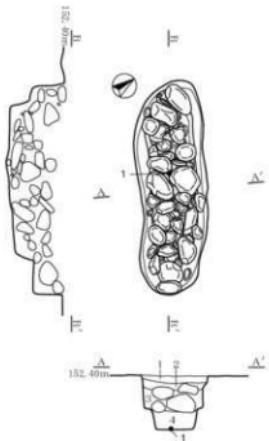
6号土坑（第 29 図／P L. 8）

位置：X=40804 ~ 40803、Y=-82184 ~ -82183。重複関係：7号溝跡と重複し、本遺構が新しい。平面形態：隅丸長方形を呈する。長軸方位：N - 25° - E。規模：長径 1.49 m、短径 0.66 m、確認面からの深さ 18 cm。断面形態：底面は段差を有し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋没状況：覆土は As-A を含む灰黄褐色土を主体とし、人為埋没と想定される。遺物出土状況：出土していない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

7号土坑（第31・32図、第13表／P.L. 8・12）

位置：X=40815～40813、Y=-82188～-82186。重複関係：4号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。平面形態：東西に長い楕円形を呈する。長軸方位：N-53°-Wを指す。規模：長径2.64m、短径0.86m、確認面からの深さ65～71cm。断面形態：底面は概ね平坦である。中央部は一段低くなつて段を有し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋没状況：上層はAs-Aを含むにぶい黄褐色土、下層は炭化物粒を含む灰褐色土を主体とする。自然埋没と想定される。石出土状態：覆土上層から下層にかけて計109点の石が出土している。石は概ね4面に分けられるが、石の上面や下面が水平に揃うような状態ではなかった。石は安山岩が主体で、長さ40cm前後の大形の石から、長さ10cm前後の小形の石まで入り混じった状態であった。遺物出土状況：覆土中から内耳鏡の破片が数点、砥石が1点出土している。2の砥石は底面直上からの出土である。時期：遺物から16世紀代に比定される。

SK-7

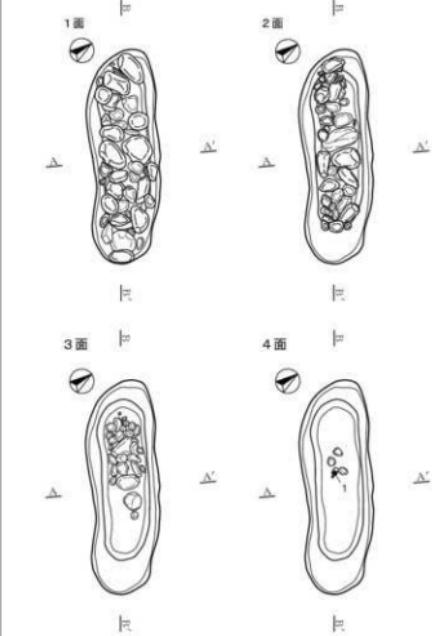


SK-7 土層説明

1. にぶい黄褐色土10R5/4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。
As-Aを少量含む。
2. 黄褐色土10R3/3/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-Aを少量含む。
3. 灰褐色土10R5/2：しまりややあり。粘性やや弱い。炭化物粒2mm～5mmのルーピングを少數含む。
4. 灰黄褐色土10R4/2/2：しまり、粘性ややあり。白色粒子を多量、炭化物粒φ1～5mmを少量含む。

0 (1:60) 2m

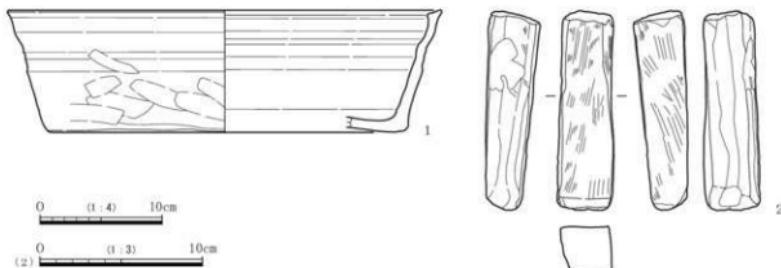
石出土状態平面図



第31図 7号土坑

8号土坑（第34図／P.L. 8）

位置：X=40816～40815、Y=-82202～-82201。重複関係：なし。平面形態：北西～南東方向に長い楕丸長方形を呈する。長軸方位：N-53°-W。規模：長径1.13m、短径0.37m、確認面からの深さ20cm。断面形態：箱形を呈する。埋没状況：覆土はAs-Aを含むにぶい黄褐色土を主体とし、人為埋没と想定される。



第32図 7号土坑出土遺物

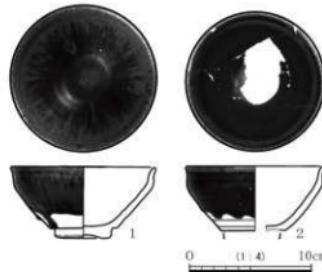
第13表 7号土坑出土遺物観察表

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | 成・整形技法の特徴 | | | | ()は推定値。[]は残存値を表す 出土位置/備考 |
|----|-------------|---|-----------------------------------|-------|-----------------------------|---|-------------------------------|
| | | | ①焼成 | ②色調 | ③胎土 | ④残存 | |
| 1 | 中世土器 内耳罐 | 口径: (35.6) 底径: (29.4) 高さ: 10.0 (1:8) | ①焼成 ②内外にぶい褐色 母、チャート、白色粒、黒色粒 | ③胎土 | ④ | 外面部: ロクロナデ。脚部は一部ヘラナデ。底部ナデ。 口脚部は外側脚部が外に突出し、中央がわずかに凹む。 内面: ロクロナデ。頂部に段をもつ。 | 覆土一括 |
| 番号 | 器種 | 法量(cm, g) | ①材質 | ②残存 | ③成・整形技法の特徴 | ④ | 出土位置/備考 |
| 2 | 砥石 | ①長さ: 12.2, 最大幅: 3.4, 最大厚: 2.7, 重さ: 192.05 | ②滑軟岩 | ③ほぼ完形 | ④4面を砥石面として 使用し、1面は非常に平滑。 | ⑤ | 底面直上 |

遺物出土状況：出土していない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

9号土坑（第33・34図、第14表／PL. 9・12）

位置：X=40826～40823, Y=-82198～-82196。重複関係：なし。北側は調査区外となる。平面形態：北東～南西方向に長い隅丸長方形を呈すと推測され、西側に同形態の浅い掘り込みが付随する。長軸方位：N - 36° - E。規模：調査区内での長径 2.53 m、短径 1.12～1.72 m、確認面からの深さ 13～18 cm。断面形態：底面はやや凹凸をもち、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋没状況：覆土は As-A・黒褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色土を主体とし、人為埋没と想定される。遺物出土状況：覆土中層から天目茶碗（1・2）が並べて伏せられた状態で出土している。時期：遺物は16世紀代に比定されると考えられるが、覆土に As-A が混入することから As-A 降下（1783年）以降の帰属と想定される。



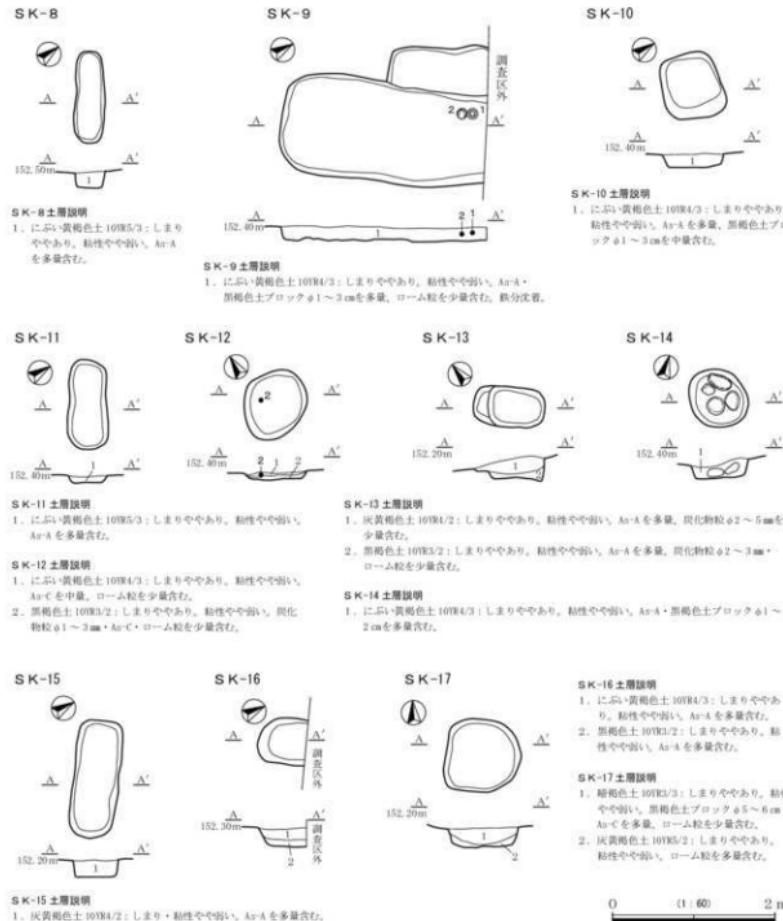
第33図 9号土坑出土遺物

第14表 9号土坑出土遺物観察表

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | 成・整形技法の特徴 | | | | ()は推定値。[]は残存値を表す 出土位置/備考 |
|----|---------|--------------------------------|--|--|------------|-----|-------------------------------|
| | | | ①焼成 | ②色調 | ③胎土 | ④残存 | |
| 1 | 陶器 碗 | 口径: 11.9 底径: 4.6 高さ: 5.9 | ①～ ②輪: 暗赤褐色、胎土: 浅黄褐色 ③白色粒 ④ほぼ完形 | 中碗。天目形。ロクロ成形。体部下方から底部にへら削り調整。削り出し高台。高台周辺を除き全面に鉄錆。釉は厚い。 | 中層/瀬戸・美濃系。 | | |
| 番号 | 器種 | 法量(cm) | ①～ ②輪: 暗赤褐色、胎土: 浅黄褐色 ③白色粒 ④高台欠損 | 中碗。天目形。ロクロ成形。体部下方から底部にへら削り調整。削り出し高台。高台周辺を除き全面に鉄錆。釉は厚い。 | 中層/瀬戸・美濃系。 | | |
| 2 | 陶器 碗 | 口径: 11.4 底径: ～ 器高: [5.3] | | | | | |

10号土坑（第34図／P L. 8）

位置:X=40821 ~ 40820, Y=-82193 ~ -82192。重複関係:なし。平面形態:隅丸方形を呈する。長軸方位:N - 77° - W。規模:長径 0.83m、短径 0.72m、確認面からの深さ 17cm。断面形態:浅い箱形を呈する。埋没状況:覆土は As-A・黒褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色土を主体とし、自然埋没と想定される。遺物出土状況:覆土中から弥生土器の破片が数点出土しているが、粉れ込みで遺構には伴わない。時期:覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。



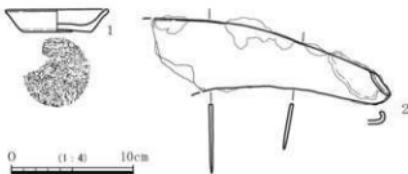
第34図 8 ~ 17号土坑

11号土坑（第34図／P L. 9）

位置：X=40822～40821、Y=-82199～-82198。重複関係：なし。平面形態：北西～南東方向に長い隅丸長方形を呈する。長軸方位：N-57°-W。規模：長径1.10m、短径0.51m、確認面からの深さ8cm。断面形態：浅い箱形を呈する。埋没状況：覆土はAs-Aを含むにぶい黄褐色土を主体とし、人為埋没と想定される。遺物出土状況：出土していない。時期：覆土にAs-Aが混入することから、近世の帰属と想定される。

12号土坑（第34・35図、第15表／P L. 9・12）

位置：X=40825～40824、Y=-82202～-82201。重複関係：なし。平面形態：梢円形を呈する。長軸方位：N-54°-E。規模：長径0.91m、短径0.75m、確認面からの深さ11cm。断面形態：浅い箱形を呈する。埋没状況：覆土はAs-Cを含み、上層はにぶい黄褐色土、下層は黒褐色土を主体とする。自然埋没と想定される。遺物出土状況：覆土上層から完形のかわらけ（1）および鉄製鎌（2）が出土している。時期：遺物から16世紀代の帰属と想定される。



第35図 12号土坑出土遺物

第15表 12号土坑出土遺物観察表

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | ①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 | 成・整形技法の特徴 | | 出土位置/備考 |
|----|------|---|-------------------------------|---------------------------|----------------------------------|---------|
| | | | | ⑤陶化焰 ⑥内外: 植 ⑦チャート、白色粒、黒色粒 | 外面: ロクロナデ。底面回転糸切り。 内面: ロクロナデ。 | |
| 1 | かわらけ | 口径: 8.4 底径: 5.6 器高: 1.8 ④ 2/3 | ①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 | ⑤陶化焰 ⑥内外: 植 ⑦チャート、白色粒、黒色粒 | 外面: ロクロナデ。底面回転糸切り。 内面: ロクロナデ。 | 上層 |
| 番号 | 器種 | 法量(cm, g) | ①法量(cm, g) ②材質 ③残存 ④成・整形技法の特徴 | 成・整形技法の特徴 | | 出土位置/備考 |
| 2 | 鎌 | ①残存長: 19.5、最大幅: 5.9、最大厚: 0.3、重さ: 113.23 | ②鉄製 ③刃部欠損 ④破片 | ②鉄製 ③刃部欠損 ④破片 | ②鉄製 ③刃部欠損 ④破片 | 上層 |

13号土坑（第34図／P L. 9）

位置：X=40824、Y=-82203～-82202。重複関係：なし。平面形態：北西～南東方向に長い隅丸長方形を呈する。長軸方位：N-43°-W。規模：長径0.87m、短径0.50m、確認面からの深さ28cm。断面形態：底面はほぼ平坦で長軸方向に段を有する。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋没状況：覆土はAs-Aを含み、上層は灰黃褐色土、下層は黒褐色土を主体とする。自然埋没と想定される。遺物出土状況：出土していない。時期：覆土にAs-Aが混入することから、近世の帰属と想定される。

14号土坑（第34図／P L. 9）

位置：X=40826～40825、Y=-82201。重複関係：なし。平面形態：梢円形を呈する。長軸方位：N-6°-W。規模：長径0.79m、短径0.70m、確認面からの深さ21cm。断面形態：箱状を呈する。埋没状況：覆土はAs-A・黒褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色土を主体とし、自然埋没と想定される。遺物出土状況：底面付近から安山岩が4点まとめて出土している。土器類は出土していない。時期：覆土にAs-Aが混入することから、近世の帰属と想定される。

15 土坑（第34図／PL. 9）

位置：X=40822～40821、Y=-82201～-82200。重複関係：なし。平面形態：北西—南東方向に長い隅丸長方形を呈する。長軸方位：N = 53° - W。規模：長径 1.46 m、短径 0.56 m、確認面からの深さ 24cm。断面形態：箱状を呈する。埋没状況：覆土は As-A を含む灰黄褐色土を主体とし、人為埋没と想定される。遺物出土状況：出土していない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

16 土坑（第34図／PL. 9）

位置：X=40829、Y=-82204～-82203。重複関係：なし。北側は調査区外となる。平面形態：楕円形を呈すと推測される。長軸方位：N = 30° - E。規模：調査区内での長径 0.60 m、短径 0.58 m、確認面からの深さ 25cm。断面形態：浅い箱状を呈する。埋没状況：覆土は As-A を含み、上層にはぶい黄褐色土、下層は黒褐色土を主体とする。自然埋没と想定される。遺物出土状況：弥生土器の破片が数点出土しているが、紛れ込みで遺構には伴わない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

17 土坑（第34図／PL. 10）

位置：X=40808～40807、Y=-82191～-82190。重複関係：1号竪穴建物跡と重複し、本遺構が古い。平面形態：隅丸方形を呈する。長軸方位：N = 85° - W。規模：長径 0.94 m、短径 0.89 m、確認面からの深さ 24cm。断面形態：箱状を呈する。埋没状況：覆土は As-C・黒褐色土ブロックを含む暗褐色土を主体とし、自然埋没と想定される。遺物出土状況：出土していない。時期：覆土と重複関係から、As-C 降下（3世紀末）以降、10世紀後半以前の帰属と考えられる。

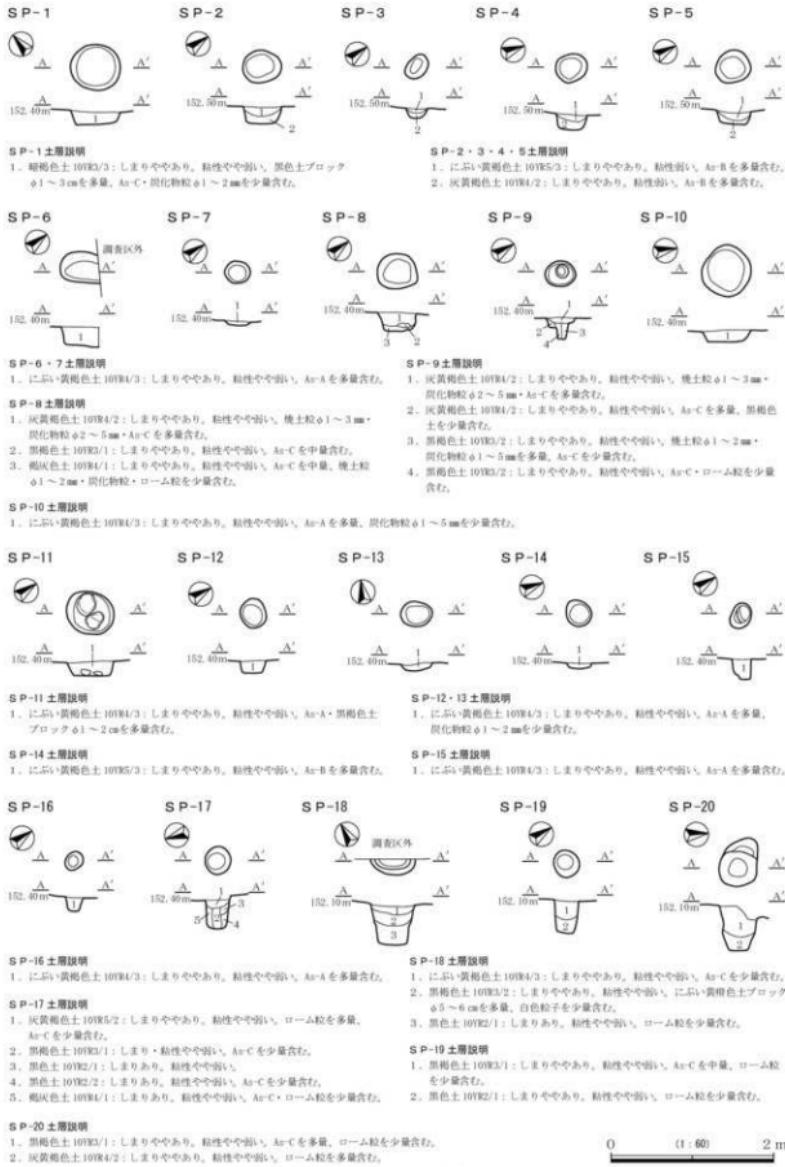
6 ピット（第36図、第16表）

ピットは20基を検出した。ピットの帰属時期は、覆土の含有テフラから① As-A 降下（1783年）以降、② As-B 降下（1108年）以降、③ As-C 降下（3世紀末）以降に大別される。これらの内、③の9・17号ピットでは柱痕が認められたが、掘立柱建物跡や柵列を構成する状況は確認されなかった。また①の11号ピットでは、底面直上から石が2点出土している。長さ 25cm 前後の安山岩で、上面が平らになるような状態であった。遺物は14・19号ピットから弥生土器の破片が出土するが、紛れ込みで遺構に伴うものではない。計測値は以下に示す。

第16表 ピット一覧表

[] は残存値を表す

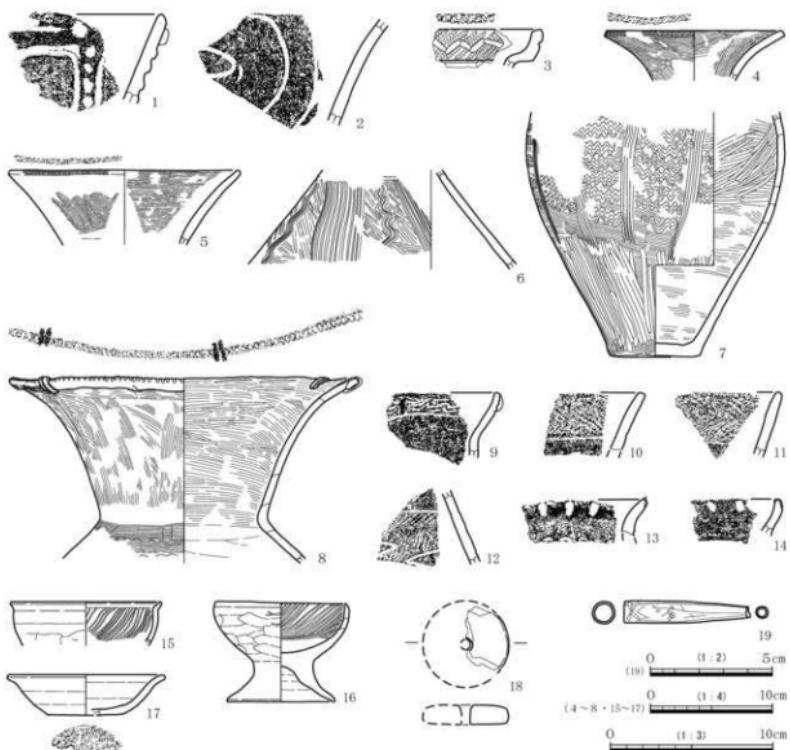
| 遺構名 | 位置 | 規様(cm) | | 含有 テフラ | 遺物 |
|-------|------------------|--------------|----|-----------|-------|
| | | 長径×短径 | 深さ | | |
| SP-1 | X=40806、Y= 82182 | 62 × 57、18 | | As-C | — |
| SP-2 | X=40806、Y= 82188 | 48 × 41、22 | | As-B | — |
| SP-3 | X=40807、Y= 82189 | 33 × 24、13 | | As-B | — |
| SP-4 | X=40807、Y= 82192 | 39 × 34、20 | | As-B | — |
| SP-5 | X=40809、Y= 82192 | 44 × 40、16 | | As-B | — |
| SP-6 | X=40819、Y= 82188 | [48] × 38、25 | | As-A | — |
| SP-7 | X=40813、Y= 82186 | 33 × 27、5 | | As-A | — |
| SP-8 | X=40820、Y= 82189 | 48 × 44、23 | | As-C | — |
| SP-9 | X=40819、Y= 82187 | 38 × 32、27 | | As-C | — |
| SP-10 | X=40822、Y= 82200 | 64 × 61、14 | | As-A | — |
| 遺構名 | 位置 | 規様(cm) | | 含有 テフラ | 遺物 |
| SP-11 | X=40824、Y= 82199 | 58 × 52、18 | | As-A | — |
| SP-12 | X=40824、Y= 82199 | 36 × 31、16 | | As-A | — |
| SP-13 | X=40825、Y= 82200 | 39 × 31、8 | | As-A | — |
| SP-14 | X=40828、Y= 82203 | 34 × 30、7 | | As-B | 弥生土器片 |
| SP-15 | X=40822、Y= 82183 | 33 × 23、25 | | As-A | — |
| SP-16 | X=40803、Y= 82182 | 24 × 20、17 | | As-A | — |
| SP-17 | X=40809、Y= 82194 | 34 × 32、35 | | As-C | — |
| SP-18 | X=40815、Y= 82181 | 55 × [19]、53 | | As-C | — |
| SP-19 | X=40820、Y= 82197 | 34 × 32、41 | | As-C | 弥生土器片 |
| SP-20 | X=40807、Y= 82190 | 58 × 47、57 | | As-C | — |



第36図 1～20号ピット

7 遺構外出土遺物 (第37図、第17表／P.L. 12)

遺構外より出土した遺物の中から、19点を掲載する。1・2は縄文土器の深鉢破片である。1は後期前半の堀之内1式、2は堀之内2式に比定される。3～14は弥生土器の壺・甕である。3～7は中期後半の栗林2式期に、8は後期後半の樽式期に比定され、竪穴建物跡の出土遺物と同じ様相を示している。13・14の甕は口唇部に指頭による押捺が施されている。15は土師器の内斜口縁坏、16は土師器の高坏で、ともに5世紀後半に比定される。17は還元不良の須恵器坏である。底面は糸切り無調整で、9世紀後半に比定される。18は土製鍾錘車の破片である。19は煙管は、吸い口の形態から小泉編年VI期、1900年代に比定される(古泉弘 1987『江戸の考古学』)。



第37図 遺構外出土遺物

第17表 遺構外出土遺物観察表

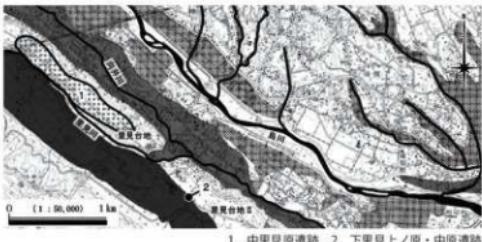
| 番号 | 器種 | 法量(cm) | ①焼成 ②調査 ③胎土 ④残存 | 成・整形技法の特徴 | | 出土位置/備考 |
|----|------------|--|--|--|--|---------------------------------------|
| | | | | ()は推定値。[]は残存値を表す | | |
| 1 | 縄文土器 深鉢 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①普通 ②内外にぶい楕 ③石英、チャート、褐色粒 ④口縁部破片 | 外面: 横位隕帶の上下に平行する沈縞文。隕帶上に円形刺突文。2条の隕位沈縞文による区画内に刺突文を連続して施す。 内面: 横・斜方向のナデ。 | | 7号土坑覆土中 ／瓶之内式。 |
| 2 | 縄文土器 深鉢 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①良好 ②外にぶい楕、内: ぶい黄楕 ③石英、チャート、黒色粒 ④胴部破片 | 外面: 沈縞文。 内面: 横・斜方向のナデ。 | | 表土／瓶之内2式。 |
| 3 | 弥生土器 壺 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①普通 ②外にぶい楕、内: ぶい黄楕 ③石英、大葉物少ない ④口縁部破片 | 外面: 受け口状口縁。口縁部に単節LR縄文。口縁部単節LR縄文を横位施文→波状沈縞文。頭部横方向のハケメ。 内面: 色面剥離により調整不規則。 | | 調査区中央部、 基本層序Ⅶ層中 |
| 4 | 弥生土器 壺 | 口径: (14.8) 底径: - 器高: [14.1] 部1/3 | ①普通 ②外にぶい黄楕、内: ぶい黄楕 ③石英、黑色粒 ④口縁部 | 外面: 口縁部に単節LR縄文。口縁部横・斜方向のハケメ。 内面: 口縁部横方向のハケメ→横・縱方向のミガキ。 | | 調査区中央部、 基本層序Ⅶ層中 |
| 5 | 弥生土器 壺 | 口径: (19.0) 底径: - 器高: [6.1] | ①普通 ②内外にぶい楕 ③石英、角閃石 ④口縁部1/6 | 外面: 口縁部に単節LR縄文。口縁部横ナデ→斜縫方向のハケメ→頭部横方向のナデ。 内面: 口縫部横方向のハケメ。 | | 調査区中央部、 基本層序Ⅶ層中 |
| 6 | 弥生土器 壺 | 口径: - 底径: - 器高: [8.1] 1/4 | ①良好 ②内外にぶい黄楕 ③チャート、黒色粒 ④胴部上位 | 外面: 縱・斜方向のハケメ→縱・縱方向のミガキ→頭部との接合部に横位沈縞文→3条1単位の櫛描垂下文(左から右へ4回施す)と彌拔文を交互に施文。 内面: 色面剥離により調整不規則。 | | 擾乱 |
| 7 | 弥生土器 壺 | 口径: - 底径: 7.4 器高: [20.2] 底部半下2/3、底部完形 | ①良好 ②外: 灰黄楕、内: ぶい楕 ③角閃石、チャート、白色粒 ④底部半下2/3、底部完形 | 外面: 腹部中位横方向のハケメ→横・斜方向のミガキ。 腹部下位横方向のハケメ。 内面: 腹部中位方向のハケメ→横・斜方向のミガキ。底部は摩耗。 | | 調査区中央部、 基本層序Ⅶ層中 ／内面脚部下位は摩耗。 |
| 8 | 弥生土器 壺 | 口径: (28.6) 底径: - 器高: [15.2] 胴部上位1/3 | ①普通 ②内外: 極 ③チャート、 白色粒、黒色粒 ④口縁部1/2、 胴部上位1/3 | 外面: 折り返し口縁。口縁部にキザミ、一部折り返しの下端部にもキザミ。2本一对の棒状貼付文。口縁部・斜方向のハケメ→縱方向のミガキ。頭部10条1単位の2連止め櫛描垂下文→8条1単位の櫛描波状文。 内面: 口縁部・斜方向のハケメ→横方向のミガキ。頭部横方向のナデ。 | | 調査区中央部、 基本層序Ⅶ層中 +トレンチA／内面ともに摩耗。 |
| 9 | 弥生土器 壺 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①良好 ②内外: 明赤楕 ③石英、 チャート ④口縁部破片 | 外面: 縱・斜位沈縞文により口縁部文様帶を区画。区内に3条1単位の櫛描波状文→縱長の貼付文。沈縞文の下はハケメ→横方向のミガキ。 内面: ハケメ→横・斜方向のミガキ。 | | 調査区中央部、 基本層序Ⅶ層中 |
| 10 | 弥生土器 壺 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①普通 ②外: 明赤楕、内: 極 ③石英、角閃石、チャート、白色粒 ④口縁部碎片 | 外面: 縱・斜位沈縞文により口縁部文様帶を区画。区内に単節LR縄文を横位施文。沈縞文の下はハケメ→ミガキ。 内面: ハケメ→横・斜方向のミガキ。 | | 調査区中央部、 基本層序Ⅶ層中 |
| 11 | 弥生土器 壺 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①良好 ②内外: 明赤楕 ③石英、 角閃石、チャート ④口縁部破片 | 外面: 縱・斜位沈縞文により口縁部文様帶を区画。区内に単節LR縄文を横位施文→斜方向の疊らなミガキ。 内面: ハケメ→横・斜方向のミガキ。 | | 14号ピット覆土 中 |
| 12 | 弥生土器 壺 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①良好 ②外にぶい赤楕、内: 黒楕 ③石英、白色粒 ④胴部破片 | 外面: ハケメ→横・斜方向のミガキ。細い横位沈縞文→單節LR縄文を横位施文→沈縞文。 内面: ハケメ→横・斜方向のミガキ。 | | 3号溝跡覆土中 |
| 13 | 弥生土器 壺 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①普通 ②内外にぶい黄楕 ③石英、角閃石、チャート ④口縁部破片 | 外面: 口縫部に指頭による押捺。口縫部横方向のハケメ→横方向のミガキ。 内面: 口縫部横方向のナデ。 | | 6号窓穴建物跡 上層 |
| 14 | 弥生土器 壺 | 口径: - 底径: - 器高: - | ①良好 ②外にぶい赤楕、内: 極 ③石英、チャート、白色粒 ④口縁部破片 | 外面: 口縫部横方向のナデ。体部ナデ下位へラケズリ。 内面: 口縫部横方向のナデ。 | | 調査区南東部、 基本層序Ⅶ層中 |
| 15 | 土師器 壺 | 口径: (12.4) 底径: - 器高: [3.6] 1/6 | ①良好 ②内外: 明赤楕 ③石英、 白色粒、褐色粒 ④口縁部～体部 1/6 | 外面: 口縫部横ナデ。体部ナデ下位へラケズリ。 内面: 口縫部横ナデ。体部放射状暗文。 | | 調査区南東部、 基本層序Ⅶ層中 |
| 16 | 土師器 高壺 | 口径: (10.7) 底径: (8.8) 器高: 8.2 部2/3、脚部3/4 | ①良好 ②内外: 明赤楕 ③石英、 チャート、白色粒、黒色粒、褐色 粒 ④口縫部破片 | 外面: 口縫部横ナデ。環部横方向のヘラナデ。脚部横ナデ。 内面: 口縫部横ナデ→环部横ナデ→放射状暗文。环底部ヘラナデ。脚部横ナデ。 | | 6号窓穴建物跡 内擾乱 |
| 17 | 須恵器 壺 | 口径: (13.0) 底径: (6.0) 器高: 3.3 1/4 | ①還元焰(還元不良) ②外: 灰黃楕、内: 黃楕 ③白色粒、黑色粒 ④1/4 | 外面: ロクロナデ。底面回転式切り。 内面: ロクロナデ。 | | 表土 |
| 番号 | 器種 | | ⑤法量 (m, g) ⑥胎土・材質 ⑦残存 ⑧成・整形技法の特徴 | | | 出土位置/備考 |
| 18 | 上製筋跡車 | 直径: (5.2), 孔径: (0.5), 厚さ: 1.2, 重さ: 14.12 ①ナデ調整。 | ②チャート、白色粒、黒色粒、褐色 粒 ③1/3 | | | 擾乱 |
| 19 | 煙管 | 長さ: 5.1, 小口径: 0.8, 吸口径: 0.45, 重さ: 6.32 ①直角断面により文様が施される(草花文か)。羅字が一部残存する。 | ②真鍮製 ③吸口部欠損 ④吸口上側に沿接痕。 | | | 表土 |

VI まとめ

今回の調査では、弥生時代の竪穴建物跡4棟、古墳時代の溝跡2条、古墳時代～平安時代の配石遺構1基、土坑1基・ピット7基、平安時代の竪穴建物跡2棟、中世の土坑2基・ピット5基、近世の溝跡(As-A復旧溝)6条・井戸跡1基・土坑14基・ピット8基が検出された。過年度の調査成果を踏まえて概観したい。

弥生時代 中期後半の栗林2式期に比定される竪穴建物跡2棟(3・4号竪穴建物跡)、後期の樽3式期に比定される竪穴建物跡2棟(5・6号竪穴建物跡)が検出された。竪穴の全容が把握できたのは5号竪穴建物跡のみだが、その中でも中期後半と後期ではいくつかの差異が認められた。各時期の特徴を挙げると、中期後半は竪穴の深さが浅く、床面の状態は3号竪穴建物跡では貼床と硬化面を確認できるが部分的であり、4号竪穴建物跡では貼床は認められず明確な硬化面も捉えられない。4号竪穴建物跡では柱穴が確認され、竪穴短辺(約4.4m)の柱穴間の距離は2.2mを測る。後期は竪穴の深さが深く、床面にはロームブロックを多量に含む貼床が認められ、全面的に非常に固く締まり頗著な硬化面を捉えることができる。5号竪穴建物跡では柱穴と炉跡が確認され、竪穴短辺(約4.1m)の柱穴間の距離は1.2～1.3mで、中期後半に比べて近く設定されている。炉跡は竪穴の北側で検出され、竪穴短辺の柱穴間に結ぶ線の外側に位置している。このように中期後半と後期を比較すると、竪穴の深さ、床面の状態、柱穴間の距離に違いがみられた。竪穴の深さや柱穴配置の違いは上屋構造の変化によるものと想定される。また、上記のような竪穴構造の特徴は、中期後半では富岡市上高田社宮子原遺跡I(水田2014)の事例と、後期では本郷台地の道場II遺跡や稲荷森遺跡(榛名町誌編さん委員会2010)の事例と共に通するものがみられ、西毛地域において通有の概念があつたことが示唆される。

群馬県の弥生文化は、大きく2つの文化期に分割される(若狭2003)。第1文化期は弥生時代前期～中期中葉まで、第2文化期は同中期後半～後期にかけてである。本遺跡周辺の弥生時代の遺跡をみると、第1文化期は烏川右岸の里見台地上に点在している。しかし、下里見上ノ原・中原遺跡で中期中葉の住居跡が1棟、中里見原遺跡で中期中葉の再葬墓が1基検出されたのみで、その様相は不明瞭である。第2文化期の遺跡は、烏川右岸の下位河岸段丘面と左岸の本郷台地上および下位河岸段丘面に分布している。集落については中期後半が本遺跡で確認される。後期は本遺跡および藏屋敷遺跡、藏屋敷II遺跡、道場II遺跡、寺内遺跡、稲荷森遺跡で確認されており、烏川左岸の本郷地区に集落が集中



弥生時代前期～中期中葉の遺跡



弥生時代中期後半～後期の遺跡

第38図 周辺の弥生時代の遺跡

し展開する様子が窺える。この時期の水田遺構は調査されていないが、地形をみると、右岸は里見川が台地を分断し下位河岸段丘を貫流・開析して複雑な低地を形成しており、左岸は本郷台地の中を小さな谷津が細かく開析している。こうした低地や谷津を利用して、小規模な水田が営まれていたと考えられている。

墓制については、第3次調査区で中期後半の再葬墓の可能性がある土坑が1基、後期と想定される礫床墓が4基検出されている。第3次調査区と集落が確認された今回の調査区とは東西に約80m離れており、墓域と集落域が分かれて形成されていたことが看取される。礫床墓は中部高地系の葬法であり、中部高地と榛名地域の関係の強さを窺うことができよう。

古墳時代 前期と想定される溝跡1条（7号溝跡）、中期～後期と想定される溝跡1条（8号溝跡）が検出された。7号溝跡は調査区外へ向かってコの字形に曲がる平面形態や、完形のS字状口縁台付表が出土することから方形周溝墓の可能性が指摘される。集落は第1～3次調査区で確認されている。前期の住居跡が2棟、中期の住居跡が30棟が検出され、特に5世紀後半の住居数が多い。榛名地域では5世紀後半に集落が増加する現象がみられ、本遺跡も同様の傾向を示している。中期に集落の盛行がみられるものの、後期の住居跡は現段階では検出されておらず、集落の中心は本遺跡から離れるものと推測される。

平安時代 再び住居跡が確認されるのは10世紀後半に入ってからである。10世紀後半の住居跡が本調査区（1・2号竪穴建物跡）と第2次調査区で3棟、11世紀代～12世紀初頭の住居跡が第1～3次調査区で3棟検出され、平安時代中期～後期に小規模な集落が営まれていたと推測される。また、集落内に耕作された畠跡も検出されており、集落内の様相を復元する上で貴重な事例となっている。

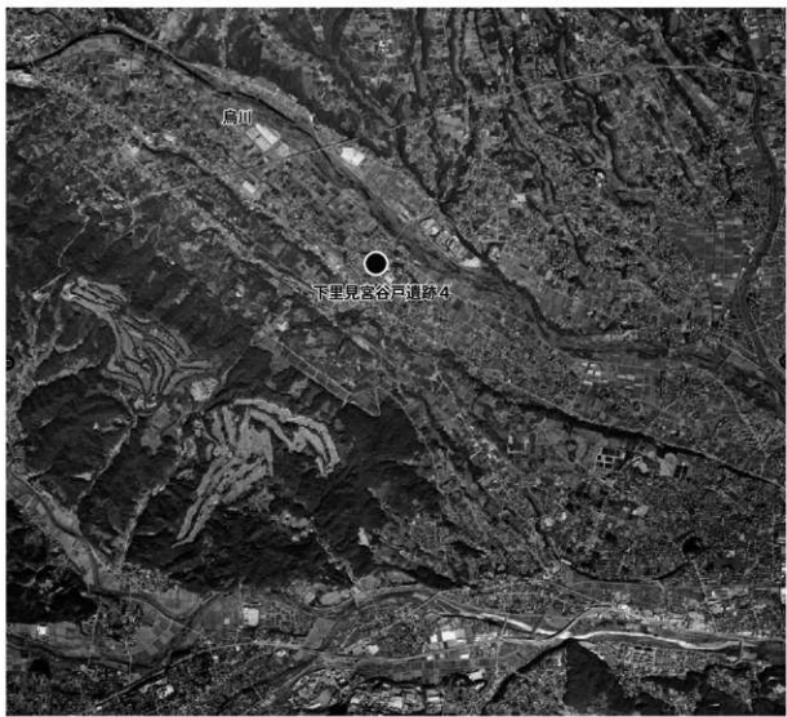
中世 中世においても人々の活動の痕跡が捉えられ、本調査区では16世紀代と想定される土坑が2基（7・12号土坑）検出された。第1～3次調査区でも中世の溝跡や土坑・ピット、14世紀代の貿易陶磁器（青磁碗）が確認されている。

本調査区の北西約50mに位置するさわらび幼稚園は、かつてこの地にあった天台宗万福寺を母体として昭和32年（1957）に開設された。万福寺は中里見にある光明寺の末寺であり、『里見村誌』によれば開基は寛永11年（1634）祐慶法印となっている。近世における寺院は信仰上の拠り所であつただけでなく、住職は様々な問題を調停・解決し、決まり事の証人になるなど、地域社会で名主などの村役人に劣らない力をもつ存在もあった。また、寺子屋を開いて村人へ教育を施したことなども知られている。本調査区では17～18世紀と想定される井戸跡や、As-A降下（1783年）以降の土坑・ピットなどが検出されており、寺院とその周辺村落での生活の一端を垣間見ることができる。

【主要引用・参考文献】

- 石川日出志 2002「栗林式土器の成立過程」『長野県考古学会誌』
財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000「中里見遺跡群・中里見中川遺跡・中里見相岸遺跡・中里見原遺跡・上里見ノ下遺跡」
里見村史編纂委員会 1968『里見村誌』
鈴木正義 2001「尾張の拠点城館遺跡出土の瀬戸美濃窯産陶器」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第2号
高崎市教育委員会 2013「下里見宮谷戸遺跡1次・下室田街道跡・上中居荒神遺跡3次」
高崎市教育委員会 2014「下里見宮谷戸遺跡2・足尾東屋敷間道跡・五雲神社古墳」
高崎市教育委員会 2014「下里見宮谷戸遺跡3・椎田閑谷遺跡・金古町裏遺跡・小八木宅地添遺跡2・飯玉遺跡3・南大船村南遺跡2」
馬場伸一郎 2008「弥生中期・栗林式土器編の再構築と分布論的研究」『國立歴史民俗博物館研究報告』第145集
椎名町誌編さん委員会 2010『椎名町誌 資料編I 原始古代』
椎名町誌編さん委員会 2011『椎名町誌 通史編 上巻 原始古代・中世』
椎名町誌編さん委員会 2012『椎名町誌 通史編 下巻 近世・近代現代』
藤澤良祐 1987『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐 1988『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VII』瀬戸市歴史民俗資料館
水田雅美 2014「上高田社宮子原遺跡1」富岡市教育委員会
若狭徹 2003「群馬県における弥生社会の成長と安中地域」『安中市史』第二巻通史編

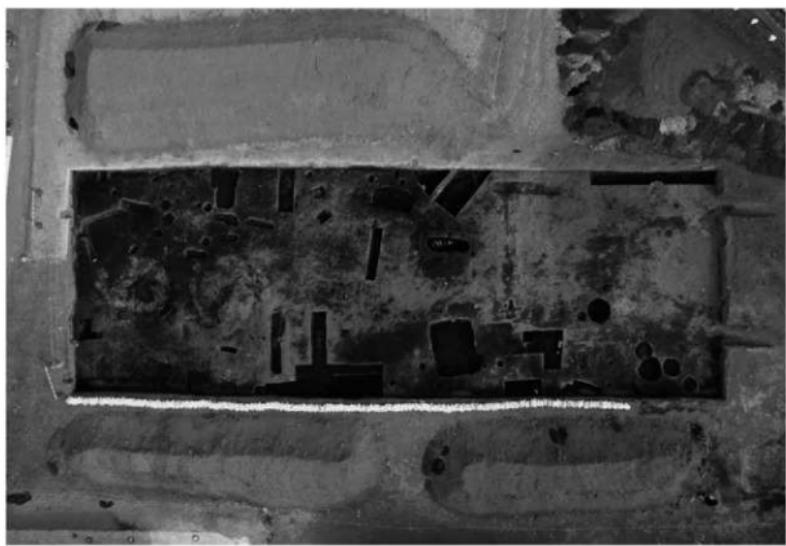
写真図版



遺跡の位置と周辺の地形（2006年国土地理院撮影 KT20061X-C5-9）



調査区遠景（南東から）



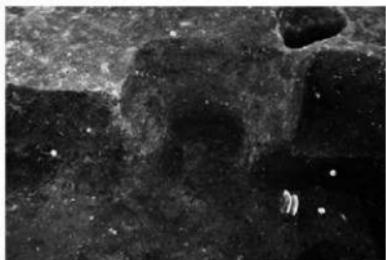
調査区全景 第1面（上が北東）



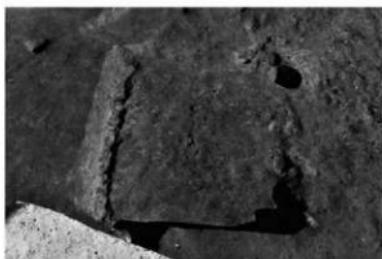
調査区全景 第2面（上が北東）



1号竖穴建物跡 全景（北西から）



1号竖穴建物跡 カマド全景（北西から）



2号竖穴建物跡 全景（北西から）



2号竖穴建物跡 炭化材出土状態（北西から）



3号竪穴建物跡 全景（北東から）



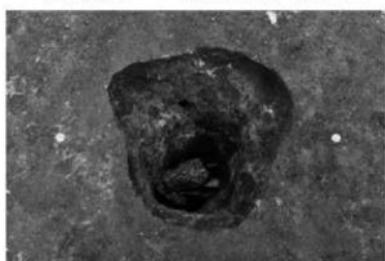
4号竪穴建物跡 全景（南西から）



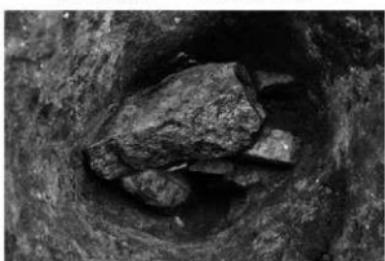
4号竪穴建物跡 P 2 遺物出土状態（南西から）



4号竪穴建物跡 P 2 遺物近景（南西から）



4号竪穴建物跡 P 2 石出土状態（南西から）



4号竪穴建物跡 P 2 石近景（南西から）



5号竪穴建物跡 全景（南から）



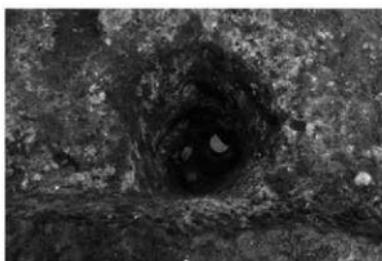
5号竪穴建物跡 全景（北から）



5号竪穴建物跡 炉全景（南から）



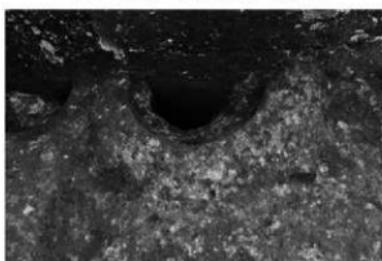
5号竪穴建物跡 炉近景（南から）



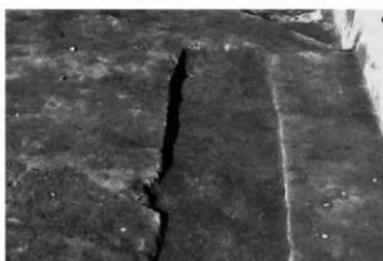
5号竪穴建物跡 貯蔵穴全景（南から）



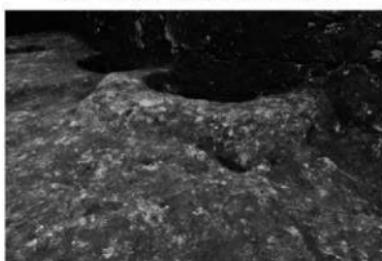
6号竪穴建物跡 全景（南西から）



6号竪穴建物跡 貯蔵穴全景（北西から）



1号溝跡 全景（南東から）



6号竪穴建物跡 貯蔵穴近景（南西から）



2号溝跡 全景（南東から）



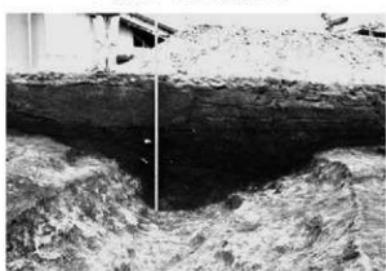
3号溝跡 全景（北東から）



4号溝跡 全景（北から）



6号溝跡 全景（北東から）



7号溝跡 土層断面（北東から）



7号溝跡 全景（南東から）



7号溝跡 遺物出土状態（東から）



7・8号溝跡 全景（東から）



8号溝跡 全景（南東から）



1号配石遺構 上面全景（北西から）



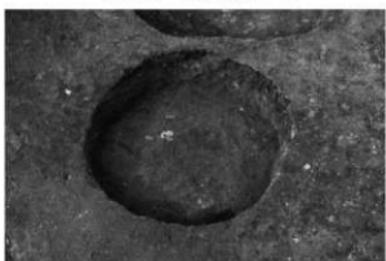
1号配石遺構 下面全景（北西から）



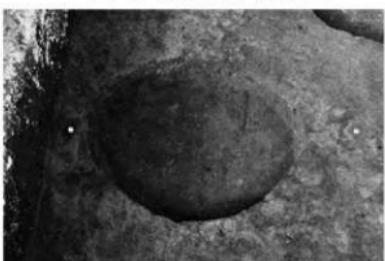
1号井戸跡 全景（北西から）



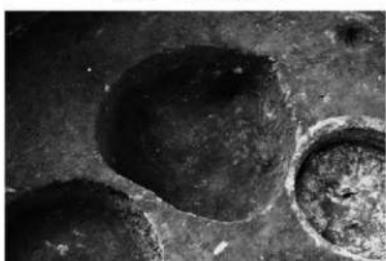
1号井戸跡 石出土状態（北西から）



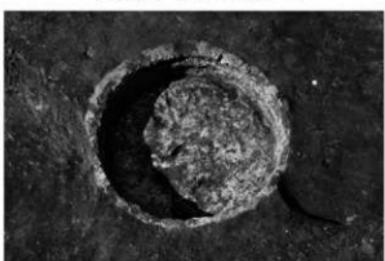
1号土坑 全景（南東から）



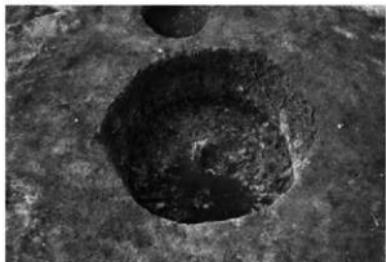
2号土坑 全景（南東から）



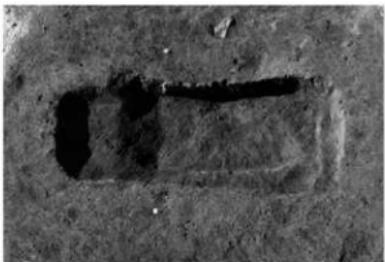
3号土坑 全景（南東から）



4号土坑 全景（東から）



5号土坑 全景（南東から）



6号土坑 全景（南東から）

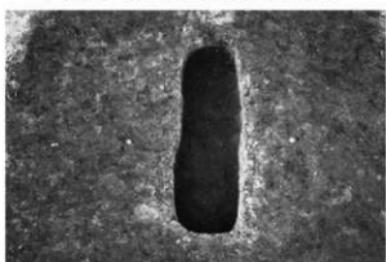


7号土坑 上面石出土状態（北西から）



7号土坑 最下面石出土状態（北西から）

7号土坑 下面石出土状態（北西から）



8号土坑 全景（南東から）



10号土坑 全景（南東から）



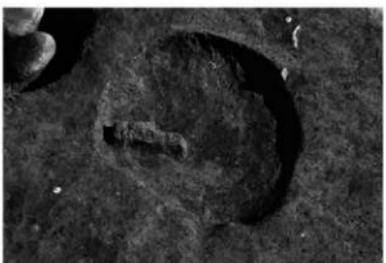
9号土坑 全景（北西から）



9号土坑 遺物近景（北西から）



11号土坑 全景（南東から）



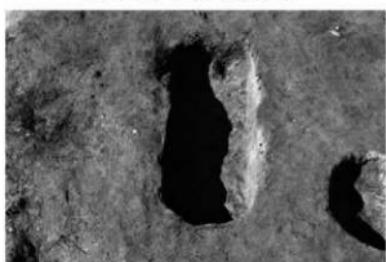
12号土坑 全景（北西から）



13号土坑 全景（南東から）



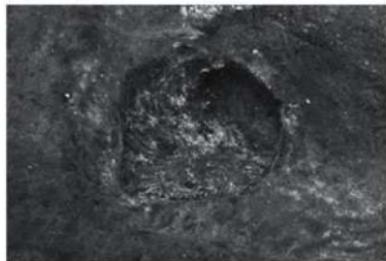
14号土坑 全景（南東から）



15号土坑 全景（南東から）



16号土坑 全景（南東から）



17号土坑 全景（南西から）



基本層序A 南西壁（北東から）

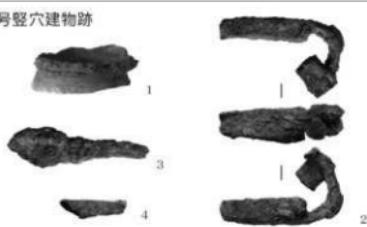


基本層序A 北西壁（南東から）

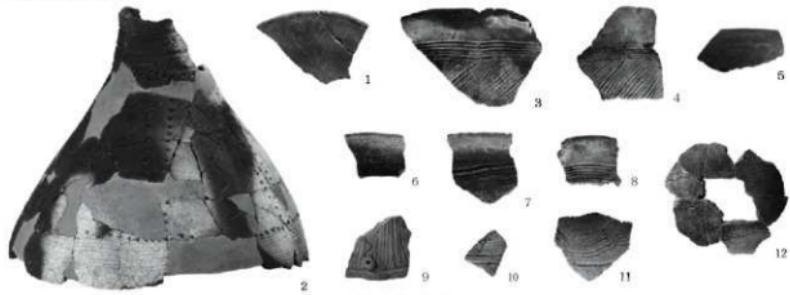
1号竪穴建物跡



2号竪穴建物跡



3号竪穴建物跡



出土遺物(1)

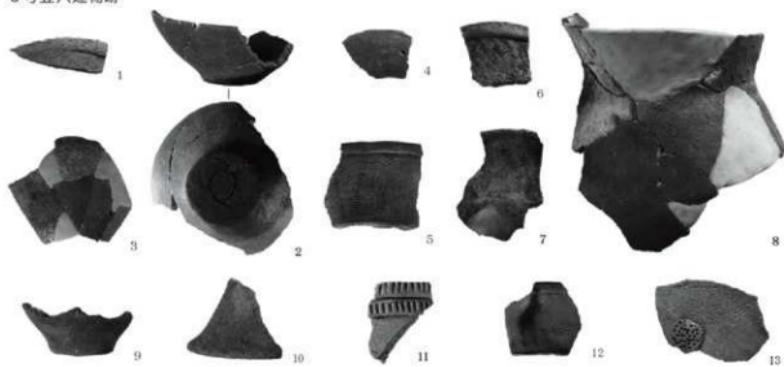
4号竖穴建物跡



5号竖穴建物跡



6号竖穴建物跡



出土遺物 (2)

7号溝跡



9号土坑



8号溝跡



1号井戸跡



1



2



4



5

5号土坑



1



2

7号土坑



1



2

遺構外



1



2



5



6



13



14



15



4



9

10



11



12



16



7



8



17



18



19

出土遺物（3）

報告書抄録

| | |
|--------|---|
| フリガナ | シモサトミミヤガトイセキ 4 |
| 書名 | 下里見宮谷戸遺跡 4 |
| 副書名 | 幼稚園の新園舎建築に伴う埋蔵文化財発掘調査 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 高崎市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第438集 |
| 編著者名 | 有山徑世 |
| 編集機関 | 有限会社 毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町 1002 番地 1 Tel 027-265-1804 |
| 発行機関 | 有限会社 毛野考古学研究所 |
| 発行年月日 | 令和元年9月30日 |

| ふりがな 所取遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 位置 | | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---------------|--|--------|-----|-----------|------------|-------------------------------|----------------------|-------------------|
| | | 市町村 | 遺跡 | 北緯 | 東経 | | | |
| 下里見宮谷戸遺跡 4 | 群馬県高崎市 下里見町字 宮谷戸451、 452-1、453、 454、455、457番 | 102020 | 754 | 36°36'42" | 138°91'73" | 2019.01.07 ～ 2019.02.22 | 579.59m ² | 幼稚園の 新園舎 建築 |

| 所取遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|------------|----|-------|----------|---------------------------------|-------------|
| 下里見宮谷戸遺跡 4 | 集落 | 弥生時代 | 竪穴建物跡 6棟 | 縄文土器、弥生土器、 | 弥生時代中期後半および |
| | | 古墳時代 | 溝跡 8条 | 土師器、須恵器、かわ | 後期、平安時代の集落。 |
| | | 古代 | 配石遺構 1基 | らけ、内耳籠、陶器、 | 古墳時代前期の方形周溝 |
| | | 中世・近世 | 井戸跡 1基 | 土師質土器（さな）、 | 墓の可能性がある溝跡。 |
| | | | 土 坑 17基 | 土製品（紡錘車）、鉄 | 古墳時代～平安時代に編 |
| | | | ピット 20基 | 製品（刀子・鎌・不明 品）、石製品（砥石）、 煙管 | 属する配石遺構。 |

高崎市文化財調査報告書第438集

下里見宮谷戸遺跡 4

－幼稚園の新園舎建築に伴う埋蔵文化財発掘調査－

令和元年9月20日印刷

令和元年9月30日発行

編集／有限会社毛野考古学研究所
発行／有限会社毛野考古学研究所
印刷／朝日印刷工業株式会社